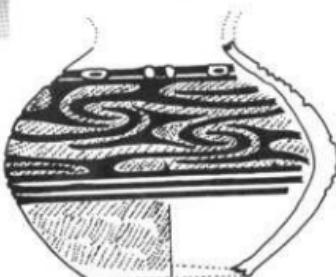




(G 2-II a 下)

☆第8群土器

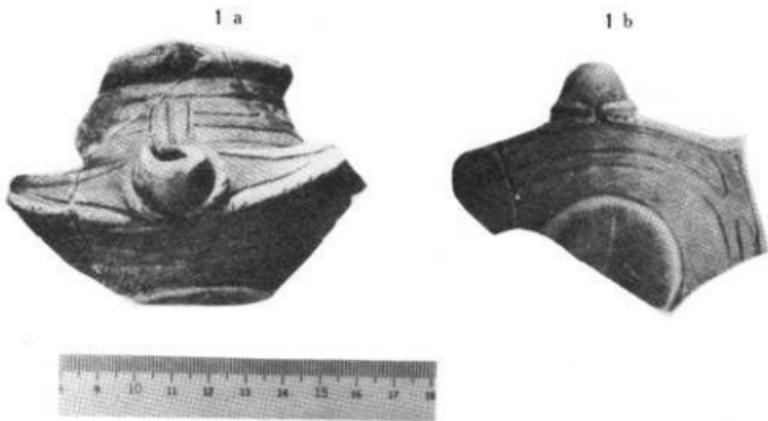
← (L, R)



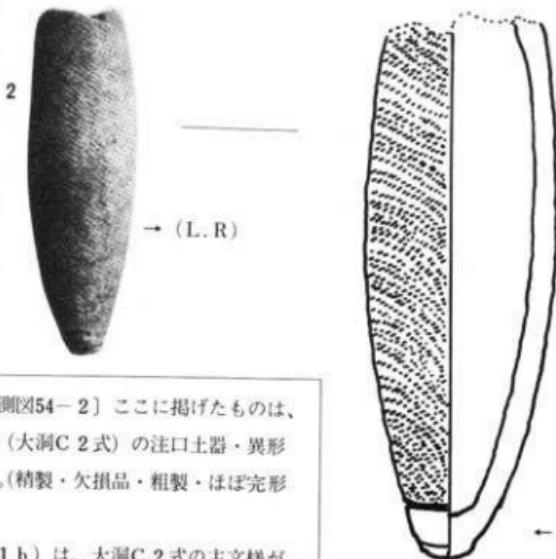
☆ [写53・実測図53] このものは、第8群土器（大洞C2式）の壺形土器である。（精製・復原土器）

- ・このものの口頸部は欠損しており、その器形は不明である。肩部には、2ヶ1対の粘土粒を4対つけられており、胸部には、(L.R) 横文を地文に横にのびる沈線文が、曲線的に施文されているもので、入組み工字文の萌芽を見せている。そして、文様帯が胴下半部までおよぶものである。
- ・色調は、黄褐色、胎土、焼成とも良好なものである。

## ☆第8群土器



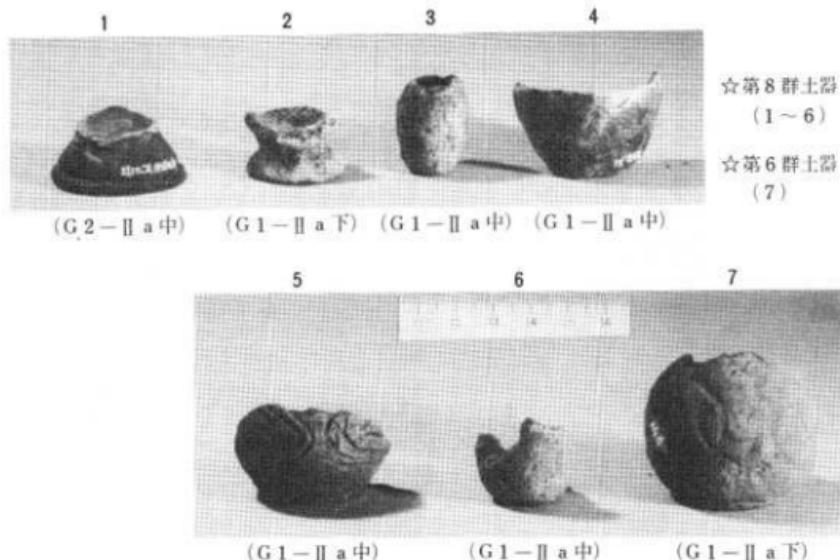
(実測図54-2)



☆〔写54・実測図54-2〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C 2式）の注口土器・異形土器である。（精製・欠損品・粗製・ほぼ完形品）

- (1a・1b)は、大洞C 2式の主文様がある注口土器で現存す程度、六角形に近い器形はめずらしいものである。
- (2)は、異形土器で、底部に沈線文が施文される。機能・用途は不明である。

## 〔台付土器台部・袖珍土器〕



## ☆〔写55・実測図55-7〕

(実測図55-7)

- ここに掲げたもののうち、(1~6)は、第8群土器（大洞C2式）に伴うものである。
- (1・2)は、台付土器の台部である。また、(3)は壺形、(4)は鉢形、(5)は壺形、(6)も壺形土器と思われる。
- なお(3~6)は、第8群土器（大洞C2式）に伴う袖珍土器である。

## ☆〔写55-7・実測図55-7〕に示したものは、第6群土器（大洞B・C式）に伴う朱ぬりの小形壺形土器である。

- 口頭部は欠損のため不明であるが、肩部より底部へかけては、菱形文等が沈線で施文され全体に朱ぬりされたもので、色調は、赤褐色、焼成はやわらかくもろいものである。



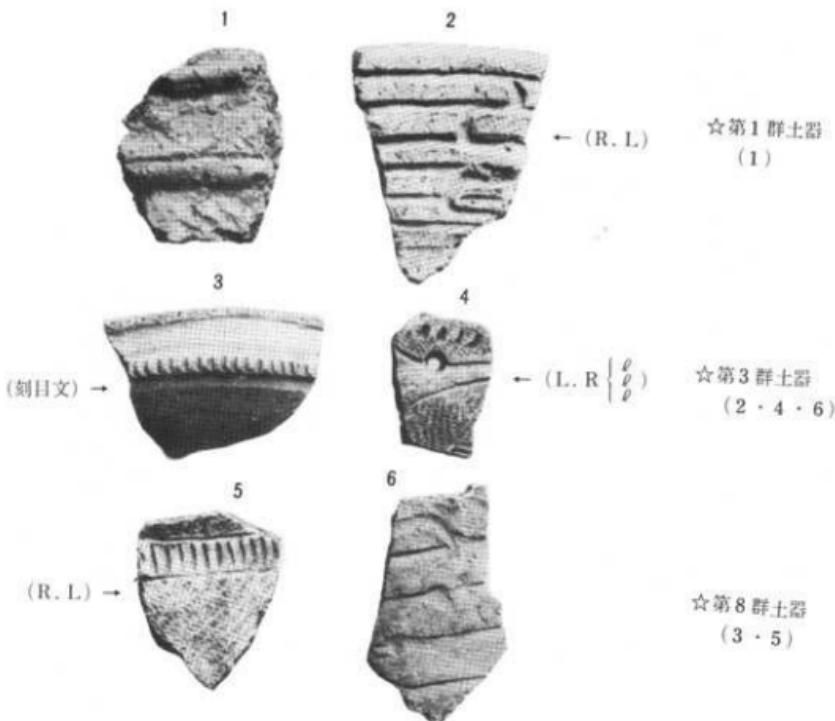
縮尺=十

〔出土土器〕

〔中期・後期の土器 P. L 1~3〕

P. L 1

(円筒土器・深鉢・皿形土器) (1~6)



☆ [P. L 1] は、縄文時代、中・後期および晩期の土器群を一括したものである。

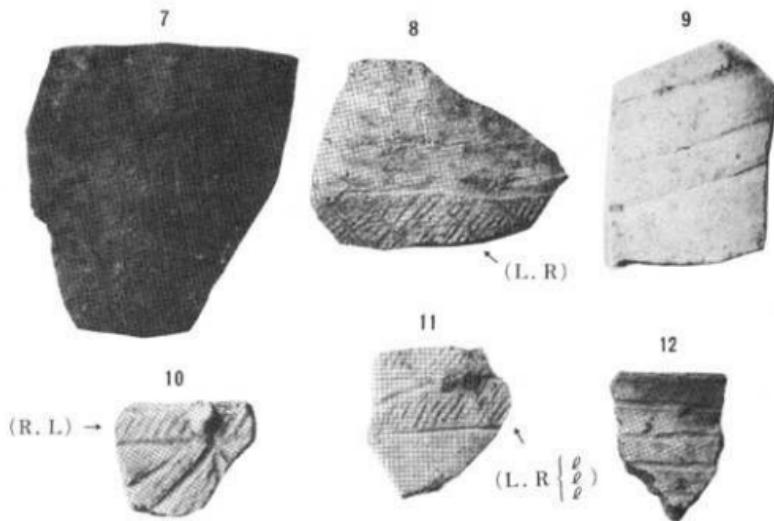
- (1) は、縄文時代中期、円筒土器 d 2類である。(第1群土器)
- (2・6) は、後期前葉の十腰内Ⅱ式土器である。また、(4) も十腰内Ⅱ式に比定されるものと考えられるが小破片のため断定は避けたい。(第3群土器)
- (3・5) は、第8群土器(大洞C 2式)に比定されるもので、皿形土器片(3)、深鉢形土器片(5)である。
- 器形→1は、円筒形、2・4・5・6は、深鉢形であろう。

[深鉢形土器] (7~12)

P. L 2

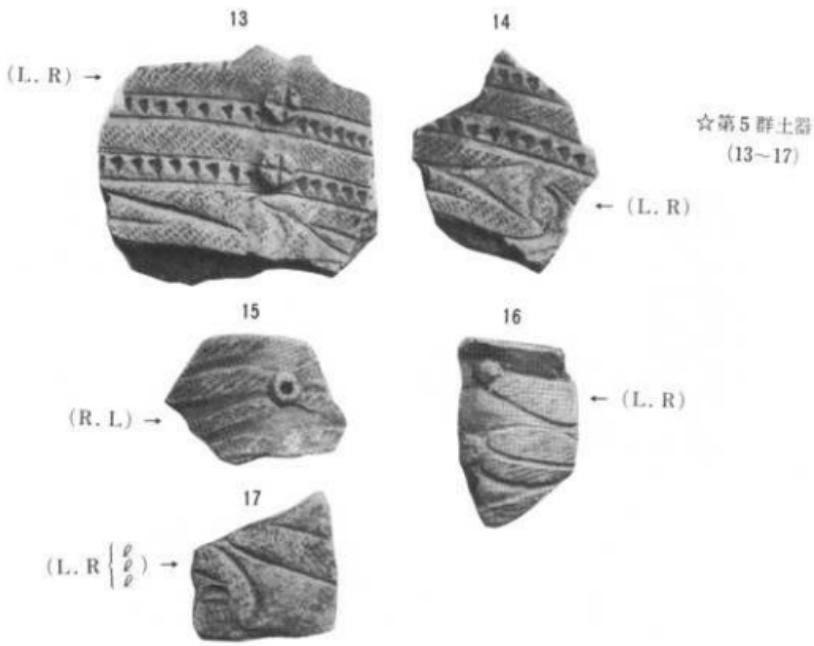
☆第2群土器 (7・8・9・12)

☆第5群土器 (10・11)



☆ [P, L 2] は、縄文時代後期の土器を一括したものである。

- 7・9・12は、後期十腰内I式土器、10・11は、十腰内V式土器に比定されるものである。
- 8は、十腰内I式土器の仲間とも思われるが破片のため断定は控える。
- 器形→7~12は、いずれも、深鉢形土器と思われる。



☆ [P. L. 3] は、縄文時代後期の土器を一括した。

- 13~17は、いずれも瘤付き土器であって、後期後葉の十腰内V式土器に比定されるものである。  
(第5群土器)

• 器形→いずれも深鉢形土器であろう。

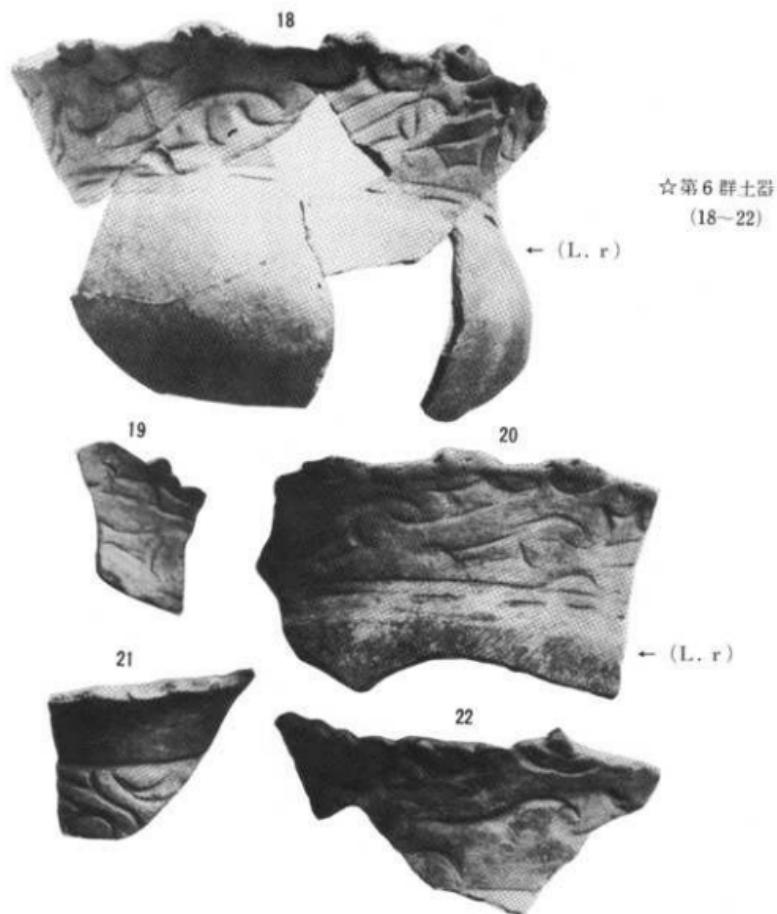
[P. L. 1~3] まとめ

- P. L. 1~3 には、第1群（円筒上唇式土器 d 2類）、第2群（十腰内I式）、第3群（十腰内II式）、第4群（十腰内III・IV式）、第5群（十腰内V式）の中期・後期の各型式の土器を揭示した。いずれも1~7片の少数である。（表4参照）（☆註 第4群土器は出土せず）

[晩期の土器 P. L 4 ~ P. L 120]

P. L 4

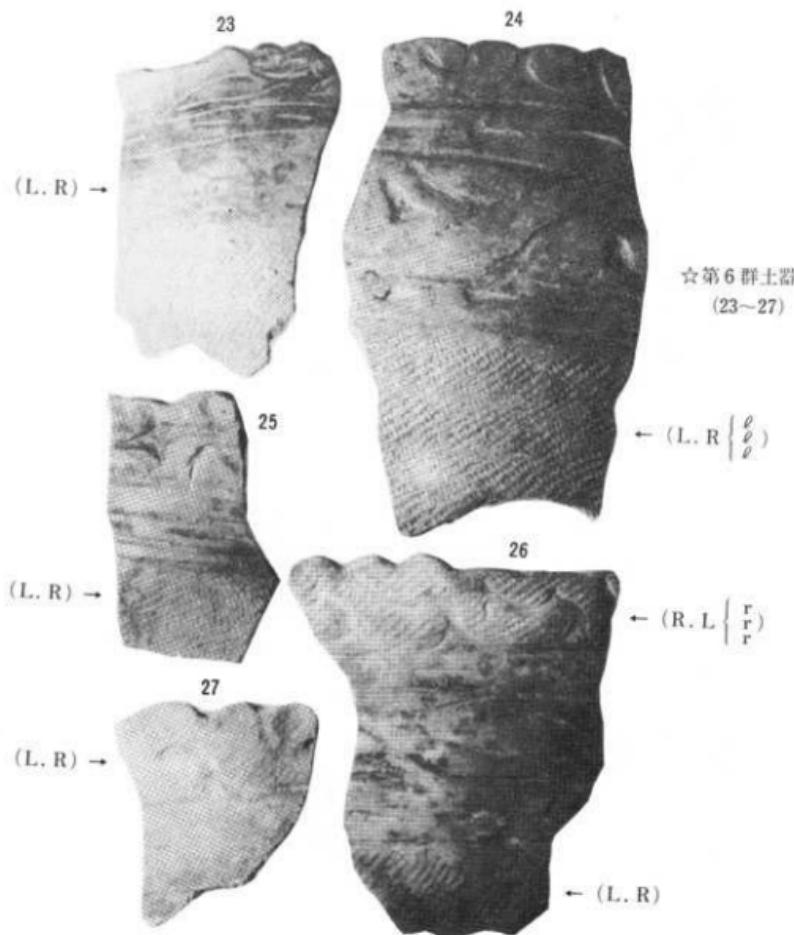
[広口壺、深鉢形土器] (P. L 4 ~ P. L 8)



☆ [P. L 4] は、縄文時代晩期、大洞B・C式土器を一括した。いずれも精製土器である。(第6群土器)

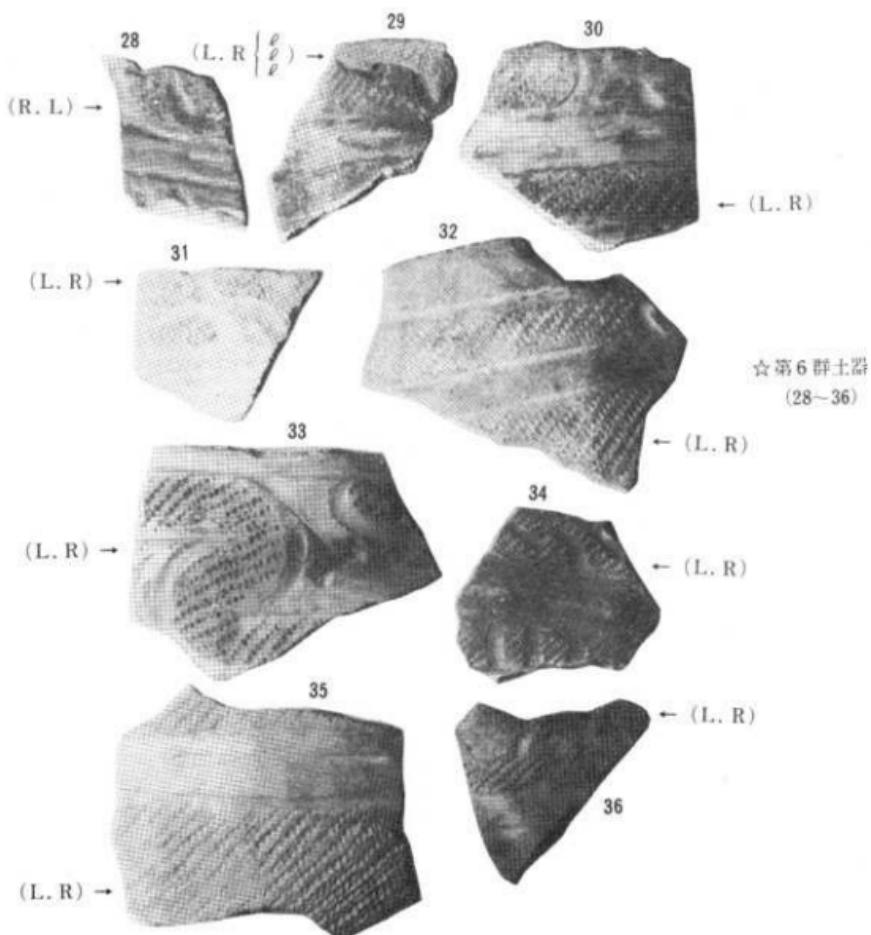
• 18・22は、同一個体のものである。このものは、広口壺形土器で、この期の一典型をなす器形である。

• 19・20も同一個体のもので、深鉢形土器である。21は、小形の広口壺形土器であろう。



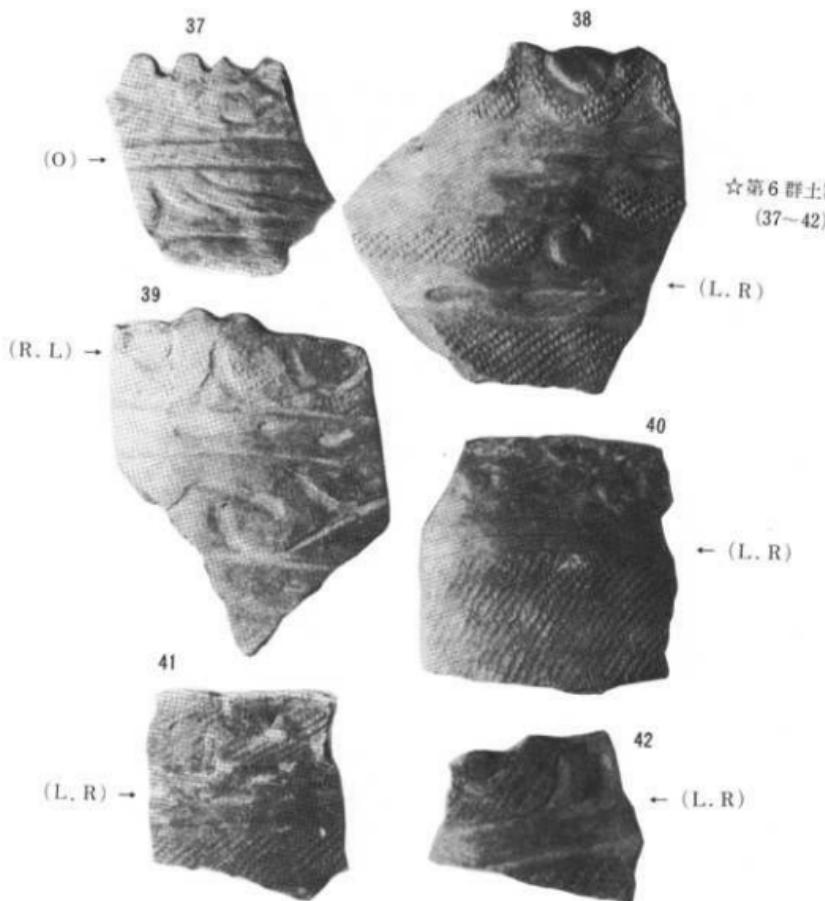
☆ [P. L 5] は、P. L 4 と同様第6群土器（大洞B・C式）の半精製土器を一括した。縄文時代晩期の土器は、精製・半精製、粗製土器に分けられる。（本文参照）

・23~27は、いずれも、深鉢形土器で、器厚は、0.3~0.4 cmと薄く、胎土、焼成とも良好で、きわめて堅緻である。



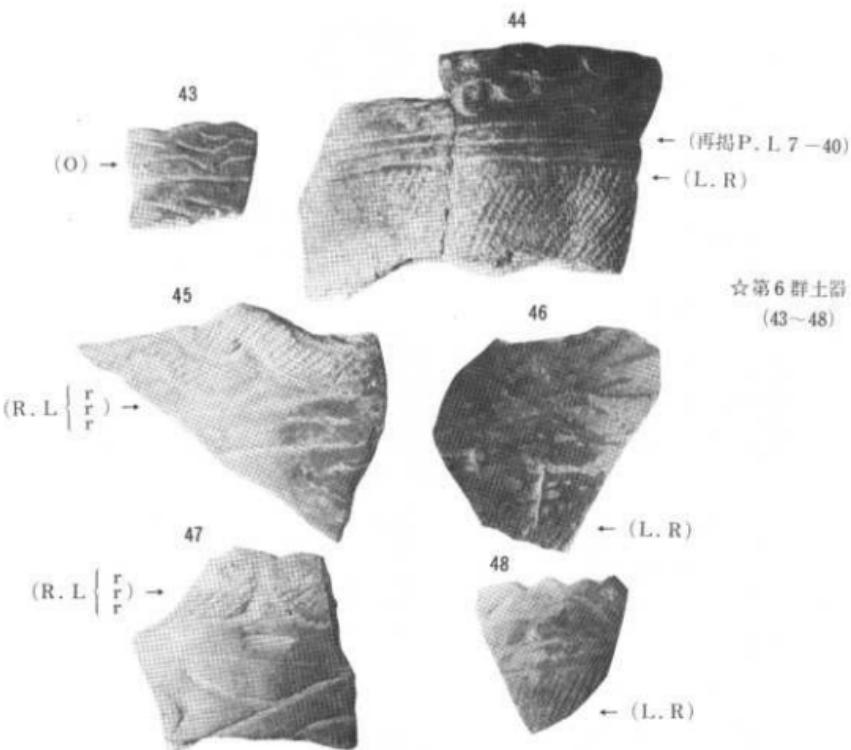
☆ [P. L 6] も、第6群土器（大洞B・C式土器）を一括したものである。いずれも、P. L 5と同様、半精製土器である。

- 28~36は、いずれも、深鉢形土器である。これらの半精製土器は、精製土器に比して、その使用期間が長いように云われている。すなわち、一型式程後までつづくものようである。
- 特にここに掲げたものは、つきの大洞C 1式土器の施文要素も見られるものであるから大洞B・C式後半から同C 1式にわたるものようである。



☆ [P. L 7 は P. L 5~6 と同様、大洞B・C式の半精製土器を一括したものである。器形は、いずれも深鉢形土器である。器厚、胎土、焼成とも、P. L 5 に記したとおりで、きわめて良好、堅緻なものである。

・特に(39)には、羊歯状文が( )見られ、この羊歯状文が大洞B・C式土器の主文様の一つである。



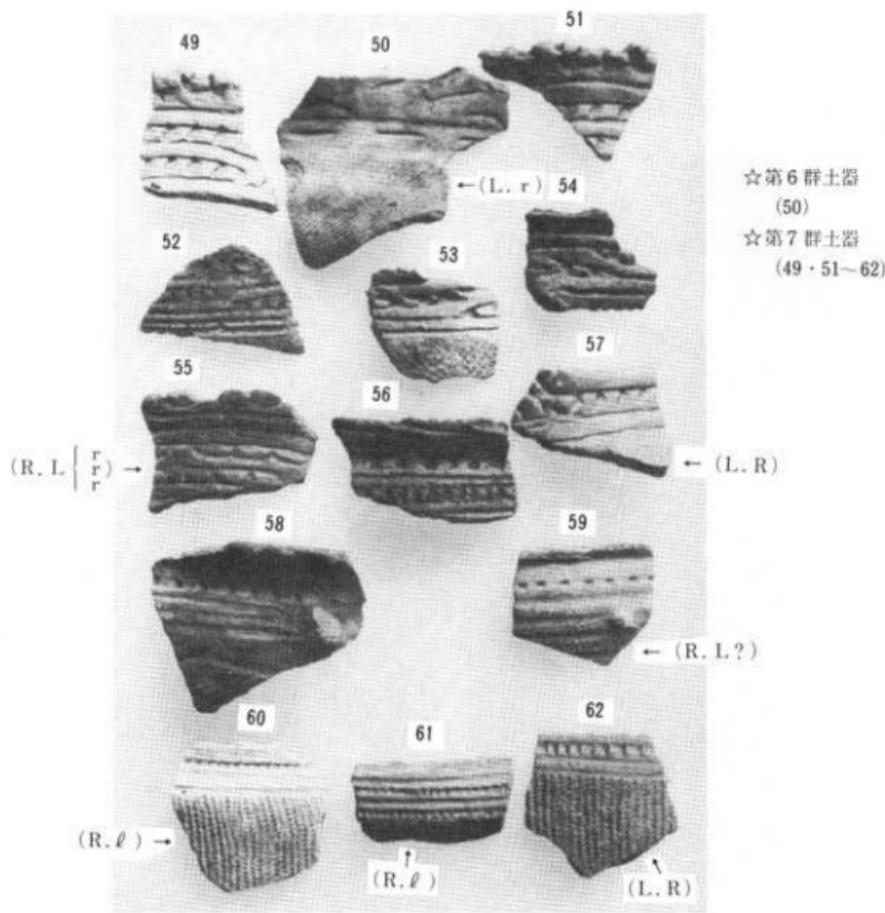
☆ [P. L. 8] も P. L. 5~P. L. 7 と同様、大洞B・C式半精製土器を一括してある。

これらの43~48も器形は深鉢形土器である。

[P. L. 4~8] まとめ

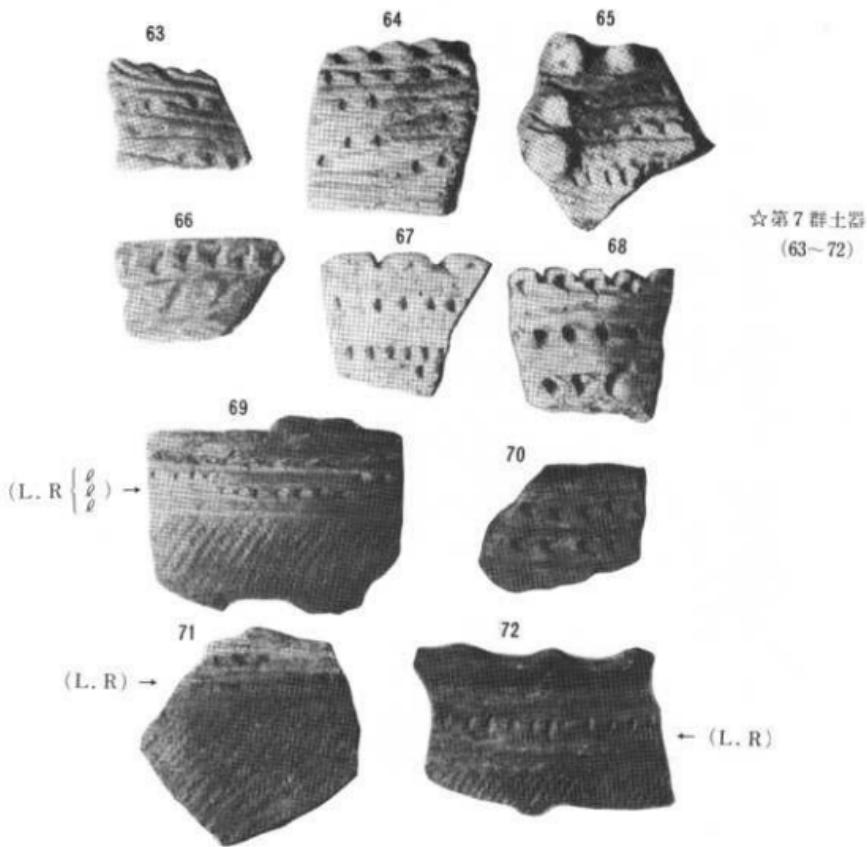
・ P. L. 4~8 では、第6群土器とした大洞B・C式の精製土器 (P. L. 4) と半精製土器を示したものである。この大洞B・C式土器は、器形別では、広口壺と深鉢形土器の二種のみである。しかも広口壺が3個体のみの出土で、他はすべて深鉢形土器で、その出土量は、約30個体分である。(注口土器は、別に掲示)

・ また、これらの P. L. 4~P. L. 8 に示す土器は、施文される縄文のほどんとが左傾する縄文 (L・R) が施文される。



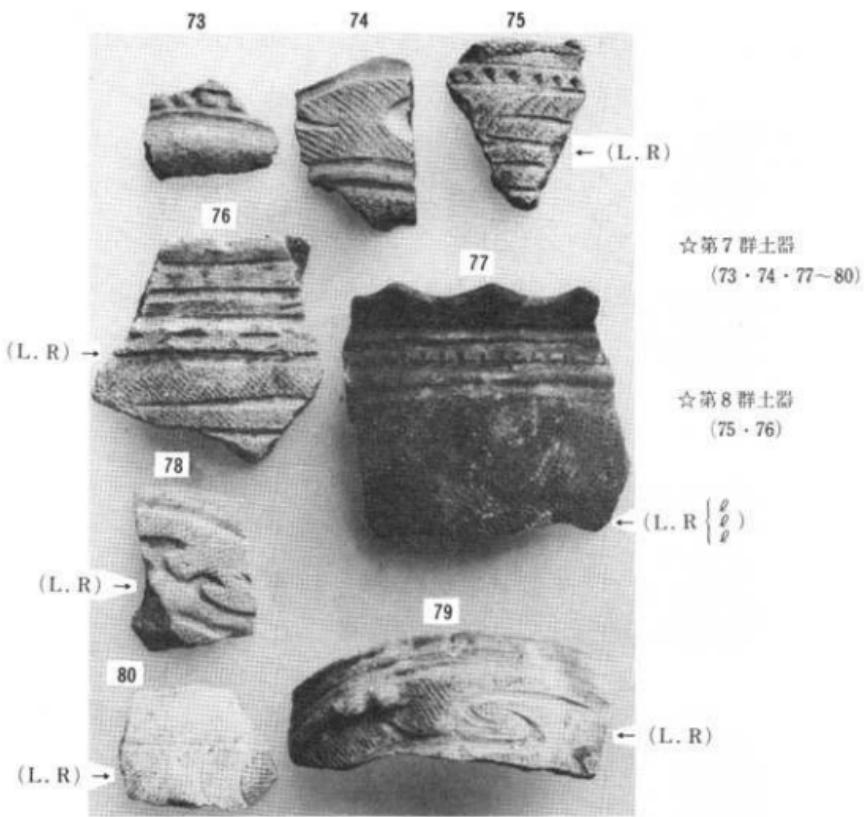
☆ [P. L 9] より、P. L 14 に示したものは、第 7 群土器（一部に第 8 群土器を含む）として分類した大洞 C 1 式土器である。（但し 50 は、B + C 式）

- ここに掲げたもののうち、(49, 51, 57, 58, 59) は精製鉢形土器である。また、(52, 53, 54, 55, 56, 60, 61, 62) は半精製深鉢形土器である。なお (50, 51) は、広口壺の可能性もある。そしてこれらのものは、純粹に大洞 C 1 式土器ではなく、大洞 B + C 式の羊齒状文の名残りを見せるものである。



☆ [P. L10] も第7群土器として分類したものである。大洞C1式の施文特徴である。横位の刺突文を見せるものである。(63~68)は、深鉢形土器である。いずれも精製土器である。

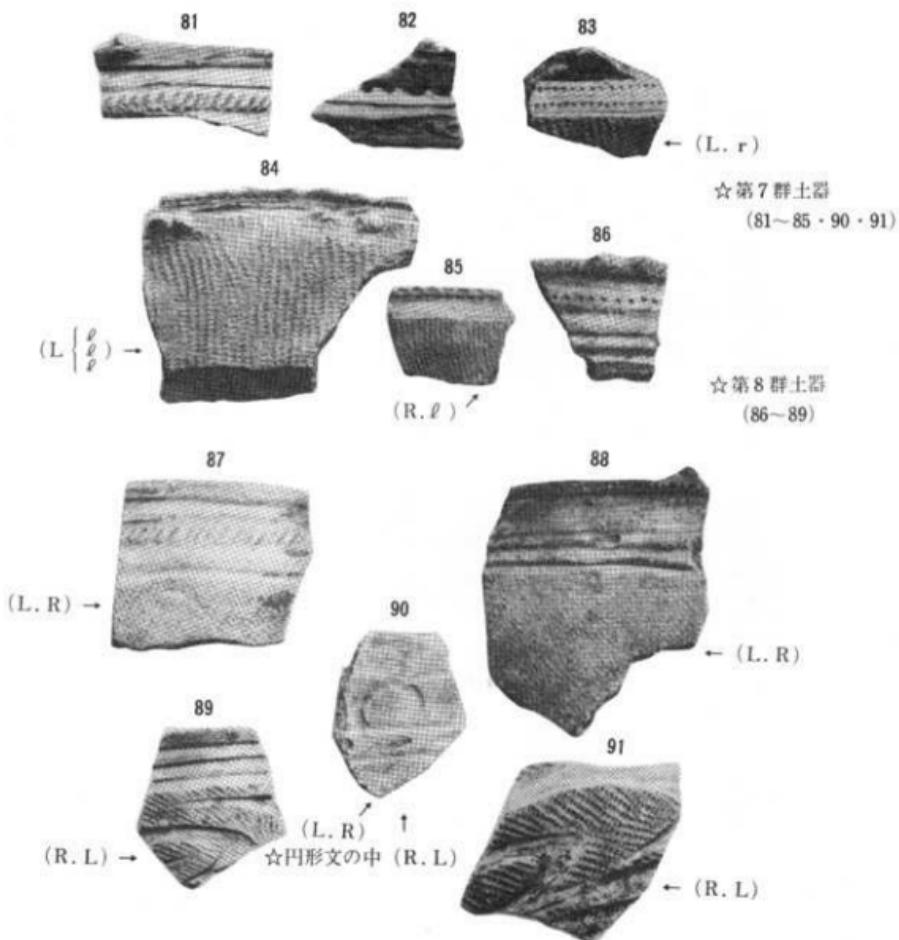
- (69~72)は、粗製土器で器形は、や、胴部のふくらむ鉢形土器である。



☆ [P. L11] は、第7群（大洞C 1式）、第8群（同C 2式）土器を掲示した。このうち、(73·74、78~80) は、精製土器で、(77) は粗製土器である。

また、(75·76) は、第8群とした大洞C 2式の半精製土器で器形は深鉢形土器であろう。

・第7群土器のうち、(73) は、広口壺、(78) は、皿形、(74、77、79、80) は鉢形土器である。



- ☆ (P. L12)、第7群・第8群土器を掲示した。このうち、(82、90、91)は精製土器で器形は、(82、90)は鉢形、(91)は壺形土器と思われる。
- ・ (81、83~85)は、半精製土器で、鉢形土器である。
  - ・ 第8群とした(86~88)は半精土器で、鉢形(86、88)、深鉢形(87)土器である。また、(89)は、鉢形の精製土器である。

92

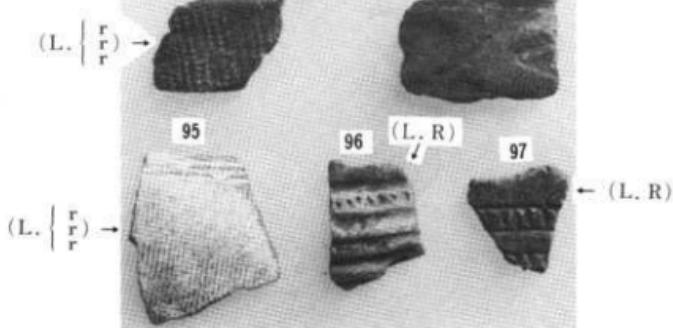


☆第7群土器  
(92~95・97)

94

93

☆第8群土器  
(96)



☆ [P. L13] のうち、(92、93) は、精製土器で鉢形土器である。これらのものは、大洞C1式の単位文様であるとX字状文が施文されるものである。また、(94、95、97) は、口縁部に沈線文と刺突文を見せる鉢形土器で、半精製土器である。

・第8群とした(96)は、口頸部施文帯が幅広く大洞C2式深鉢土器である。(半精製土器)

98

99

(L. R) →

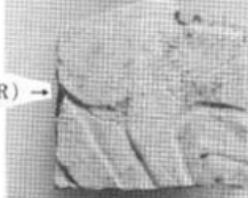


100

(G<sub>1</sub> - I b ϕ) →

102

(L. R) →



101



103

← (L. R) { $\frac{\ell}{\ell}$ }

☆第7群土器

(98~100・102・1 3)

☆第8群土器

(101)

← (L. R)

☆ [P. L.14] は、いずれも精製土器である。第7群とした土器のうち、(98、100)は鉢形、(99)は壺形、(102)は深鉢形、(103)は皿形土器である。

- また、(101)は、口頸部に平行沈線文、肩部から胴部へは、横に流れる雲形文と思われる施文のある鉢形土器である。

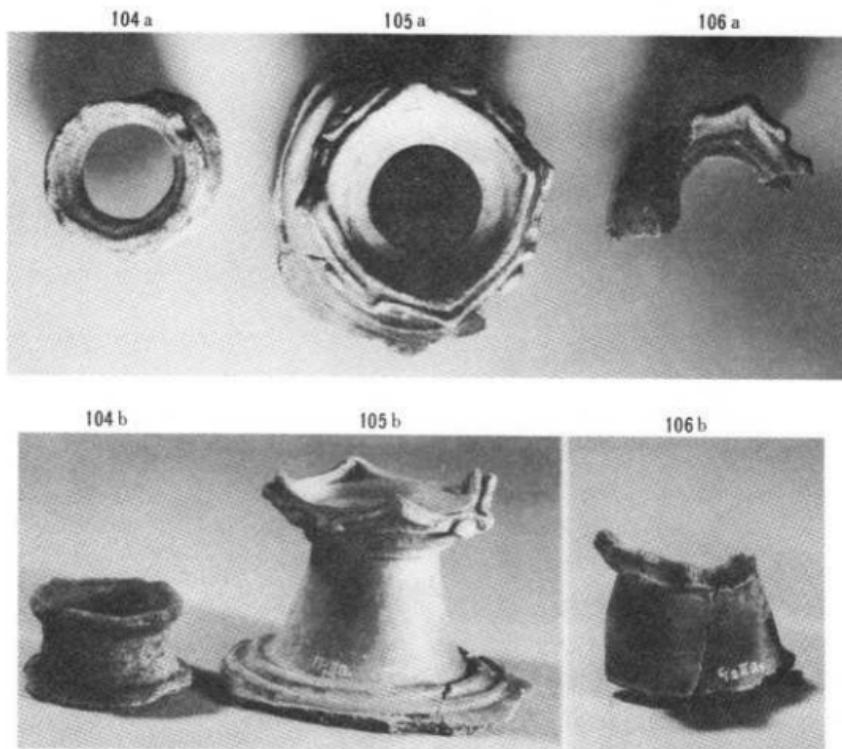
☆ [P. L. 9~P. L.14] のまとめ

- P. L. 9~P. L.14 では、第7群土器(大洞C 1式)を主とし、第8群土器(大洞C 2式)の一部を揭示した。(第8群土器は、後述)
- 第7群土器としたものは、極めて少量の出土で、揭示したものが出土量の大部分である。出土層は、II a 層下位から多く出土した。(表4参照)
- 器形別では、鉢形が最も多く、壺形、深鉢形、皿形が少量含まれる程度である。

〔壺形土器〕 (P. L.15~P. L.28)

P. L.15

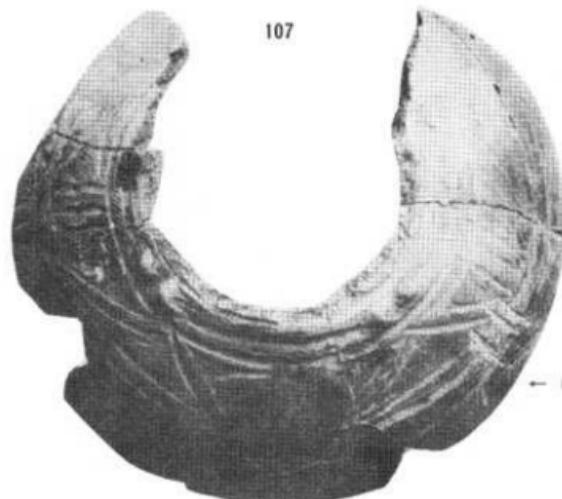
☆第8群土器 (104a~106b)



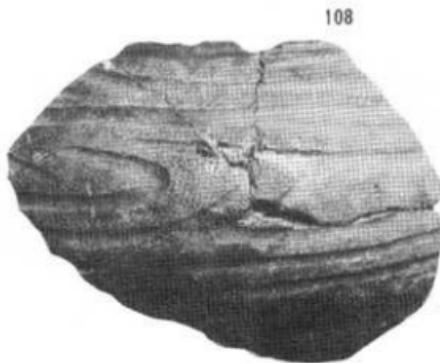
☆ [P. L.15] は、いずれも、第8群（大洞C2式）土器の典型的な壺形土器の口頸部を掲げたものである。このうち、(104a、104b)は、粗製、他は、精製壺形土器である。また、(105、106)は、朱ぬりの痕跡を認めるものである。

- (105b) で代表されるように、大洞C2式期の壺形土器の頸部は、据広がりで頸部が細長いものが1タイプである。

(P. L.15~P. L.28) には、出土した壺形土器を一括して掲げたものである。

☆第8群土器  
(107・108)

← (L, R→地文)



← (L, R→地文)

← (L, R)

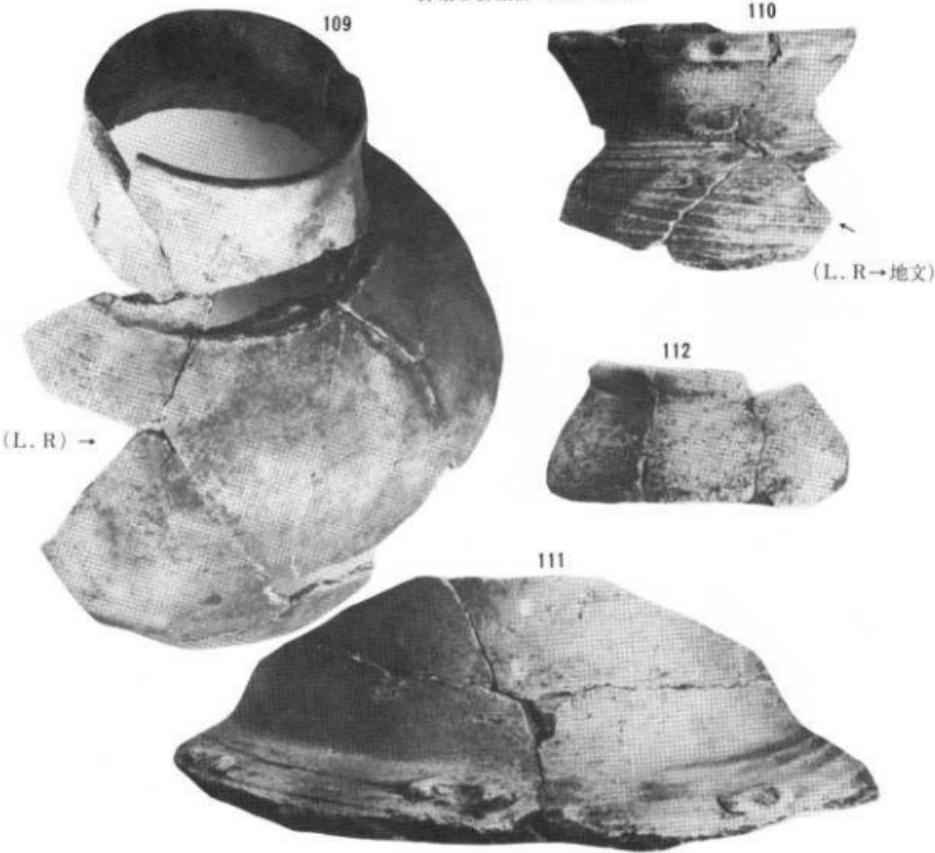
☆ [P. L16] は、第8群（大洞C 2式）土器の典型的施文のある壺形土器の2例を掲げたものである。

- ・ (107) は、平行沈線文と縦位の沈線文によって区画され、その区画内に2本の斜行する沈線文が施文されるもので、その空間にはL・R縞文が施文されている。
- ・ (108) は、磨消縞文の手法を見せる曲線文と平行沈線文が施文され、地文の縞文はL・R左傾縞文である。

〔壺形土器〕 (109~112)

P. L17

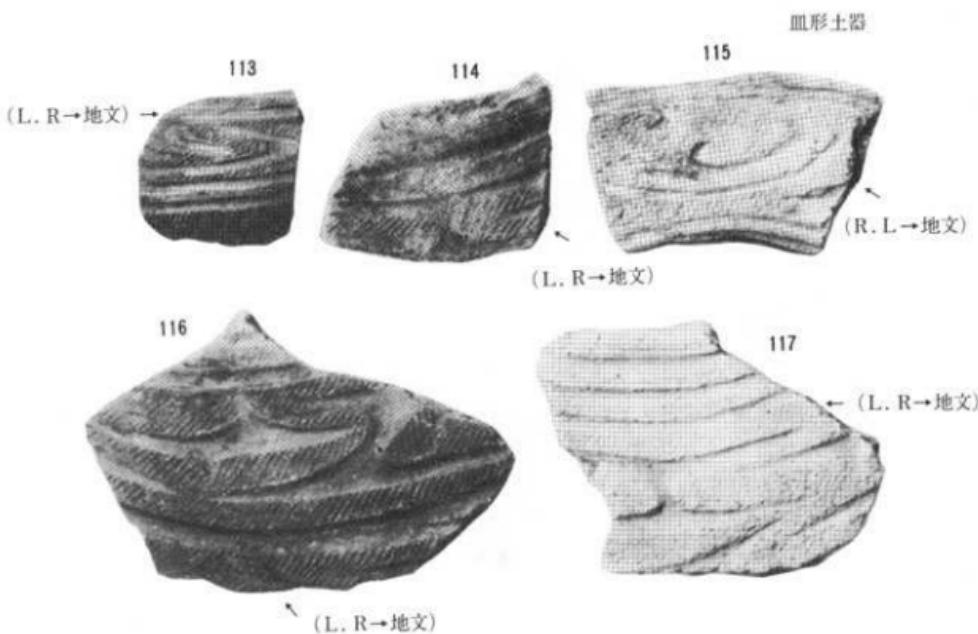
☆第8群土器 (109~112)



☆ [P. L17] に掲げたものも壺形土器の例である。

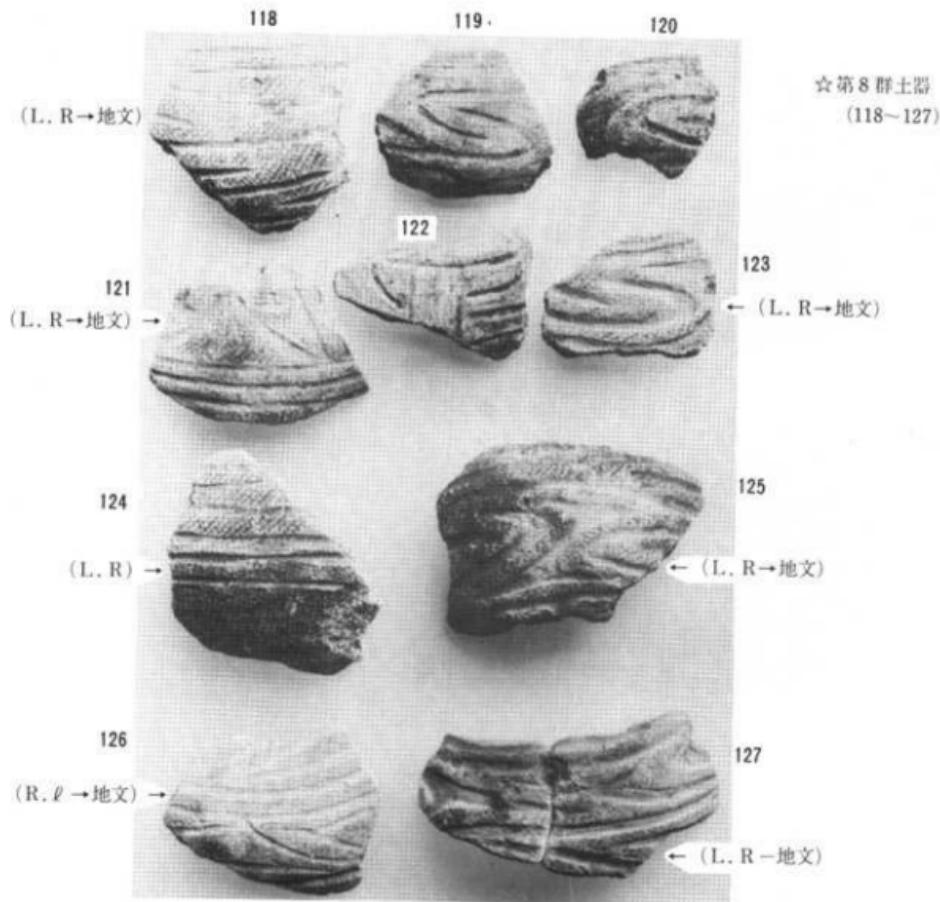
- ・(109)は、無文の壺形土器で、口頸部は、平縁で直立した頸部を有するタイプである。このタイプは、大洞C2式の後半に出現するタイプである。
- ・(110)は、(109)と異なり、肩部より外反する頸部をもち、口縁には小突起をもつもので施文は、横に流れる雲形文である。このものは、大洞C2式の典型的タイプである。
- ・(111)は、大形壺であり、(112)は、小形の無頸壺と思われる。なお(109, 112)は粗製、(110, 111)は精製土器である。

☆第8群土器 (113・115)  
 ☆第9群土器 (114・116・117)



☆ [P. L18] は、第8群（大洞C 2式）土器の壺形土器の胴部破片である。(115は壺形土器)

- ・このもののうち、(113・115) は、第8群土器とした大洞C 2式の典型的施文である。
- ・また、(114・116・117) は、大洞C 2-A式→仮称の施文ではあるが、この施文が、いま少し平行化すると、つぎの大洞A式期の施文である。入組工字文、また、変形工字文（ボジティブ）に近くなる前提を示しているように思われる。
- ・特に (114) は、破片のため断定は控えるがその可能性がある。
- ・施文された地文の繩文は、(113・114・116・117) は二段單節L,R繩文である。また、壺形土器である (115) は、R,L繩文である。
- ・(113~117) は、精製土器である。



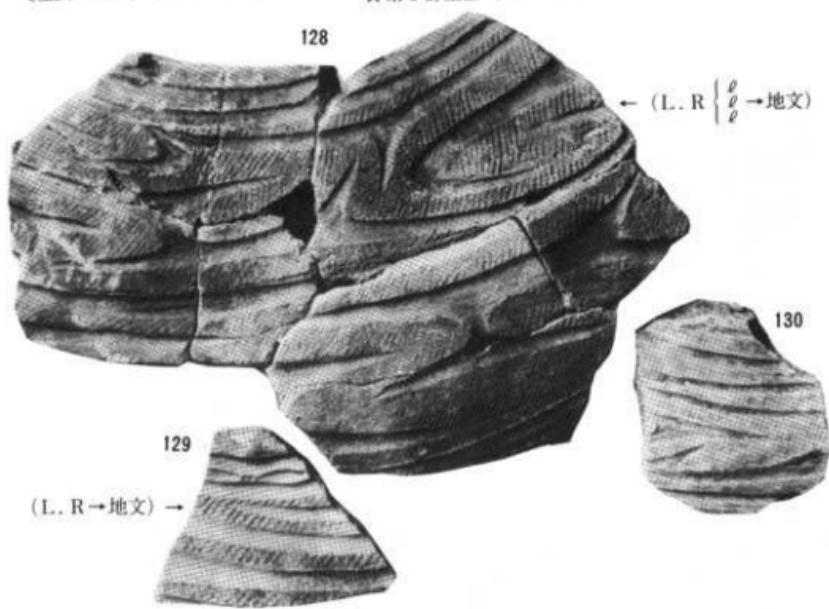
☆ [P. L19] は、第8群土器（大洞C 2式）の壺形土器胴部破片を掲げたものである。大洞C 2式の施文タイプが理解される例である。(精製土器)

- ・また、(118~121, 123~127) に地文として施文される縄文は、L.R のもの (118~121, 123~125・127) で、(126) は撚糸文 (L  $\nearrow$ ) で、すべて斜行 (左傾) するものである。

〔壺形土器〕(128~130)

☆第8群土器(128~130)

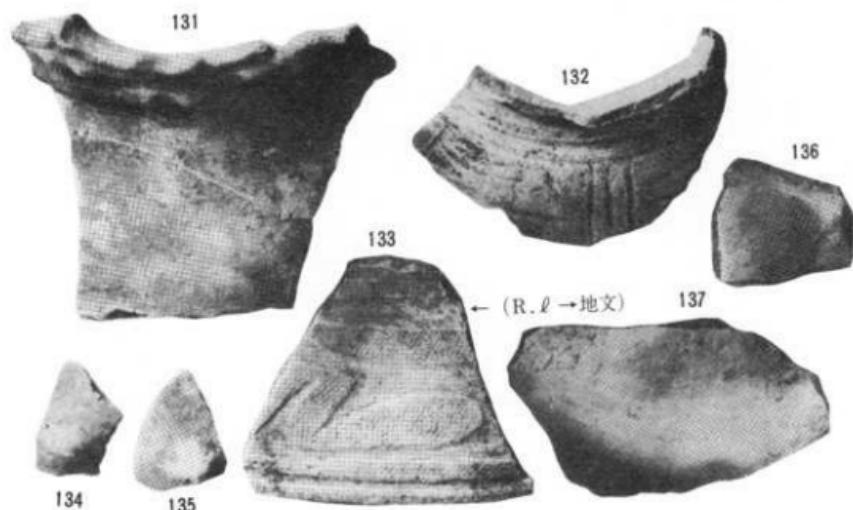
P. L20



☆〔P. L20〕に示したものも大形壺形土器の胴部破片である。いずれも第8群(大洞C2式)土器の精製壺形土器である。

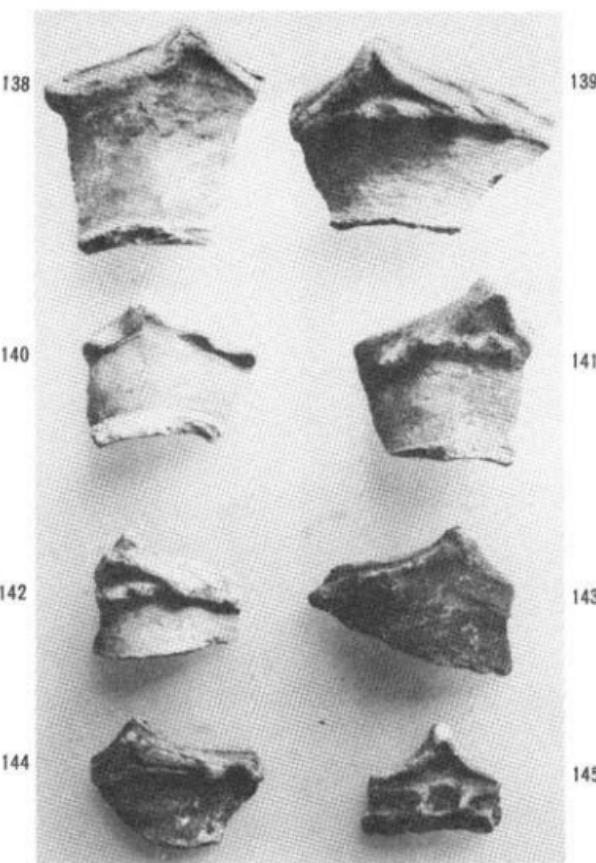
- ・(128)は、大洞C2式の典型的施文パターンの一つである。また、(130)は、破片のため単位文様は不明であるが沈線文が多用されるもので、第8群土器の仲間である。なお、このものは地文の縄文がない。
- ・(129)としたものは、頸部下の破片であるが、横位の押圧文が見られるもので、この施文傾向は、つぎの大洞A式の手法につづくものであろう。
- ・(128・129)の地文である縄文は、二段単節L.R縄文でやはり左傾する。すなわち、左傾するL.R縄文が多用されているのである。

☆第8群土器 (☆第7群土器—133)



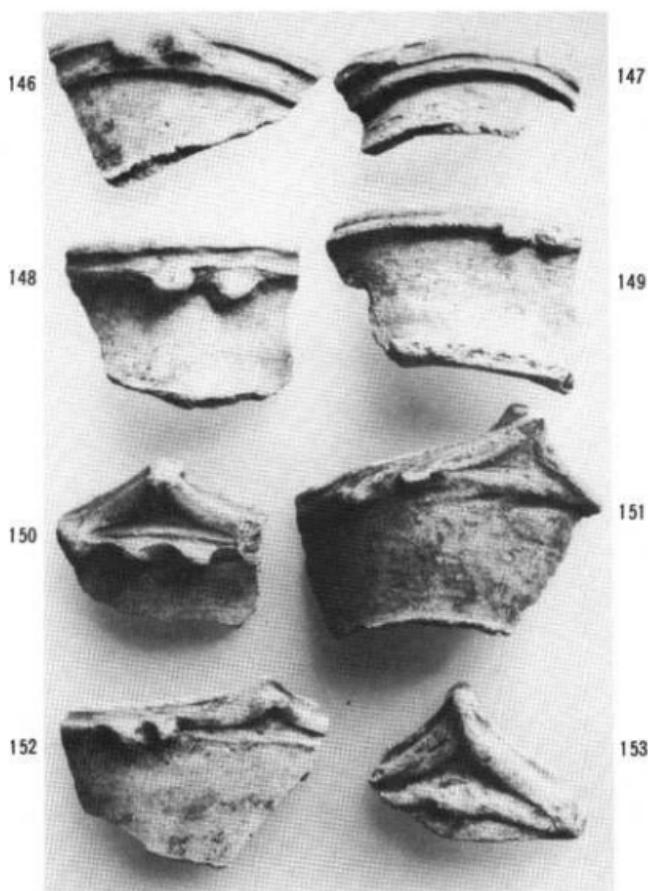
☆ [P. L21] に掲げたものも、第8群（大洞C 2式）土器の壺形土器破片である。

- (131) は、大形壺形土器の口頸部破片で、口縁部突起とその装飾のあり方が良い例となると思われる。また、このものの口縁内部には2条の沈線文がある。
- (132) は、この期の典型的施文のある、中形の壺である。
- (134・135・136・137) は、いずれも壺形土器の底部破片で、いわゆる四脚のある壺形土器（写28参照）の底部破片である。このうち (134・135) は朱ぬりの痕跡を認める。
- (133) は、破片のため単位文様が不明であるが第7群（大洞C 1式）土器と思われる。地文の繩文は、二段单節L.Rである。
- なお (133~137) は、精製土器 (131・132) は半精製土器である。

☆第8群土器  
(138~145)

☆ [P. L 22] ~ [P. L 27] に示したものは、壺形土器の口頸部、および胴部破片を示したものである。

- このうち、[P. L 22] に掲げたものは、いずれも壺形土器の口頸部破片で、口縁に 1 つの山形突起を有するものである。(精製または、半精製土器)
- この山形突起を中心、口縁下の装飾も極めてパライティに富むのが第8群 (大洞C 2式) 土器の一つの特徴である。

☆第8群土器  
(146~153)

☆〔P. L.23〕ここに示したもののうち、(150~153)は、いずれも〔P. L.22〕と同様、1この山形突起を持つ壺形土器の口頸部破片である。山形突起そのものにも形態、その他に変化があり、きわめて、変化に富んでいる。

- ・また、(146~149)に示したものも壺形土器の口頸部破片であるが、山形突起がなく平縁の口縁をなすものである。この平縁タイプも第8群土器（大洞C 2式）の一タイプであるが出土数は、突起をもつものより少ない。
- ・(146~149)は、精製、(150~153)は粗製土器である。

[大形壺形土器口縁部] (154~159)

P. 1.24

154

☆第8群土器 (154~159)

155



156 (154に同じ)

157 (155に同じ)

158

159

(L, R→地文)

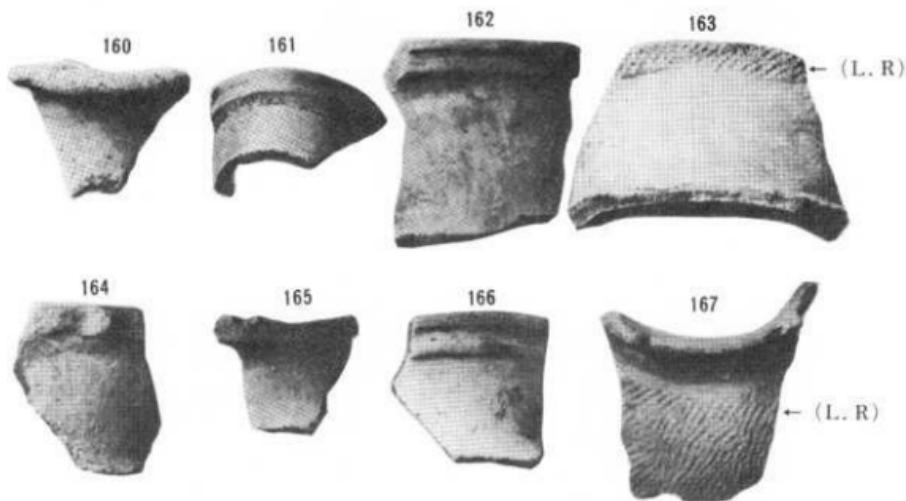
← (L, R)

(L, R) →



☆ [P. L. 24] ここに掲げたもののうち、(154~157) は、1 この突起をもつものであり、(158) は、平縁で口縁下に粘土粒がなく、肩部に隆帯と、粘土粒を持つもので大洞C 2式期の1タイプである。また、(159) も僅少ながら1タイプをなすものである。(154~158) は精製。(159) は、半精製土器。

## ☆第8群土器(160~167)

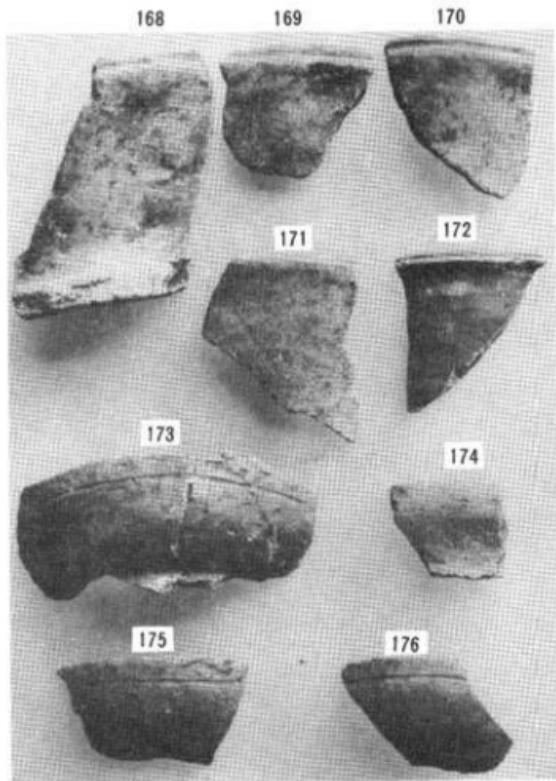


☆ [P. L25] ここに示したものも各々 1 タイプをなす壺形土器の口頸部破片を掲げたものである。

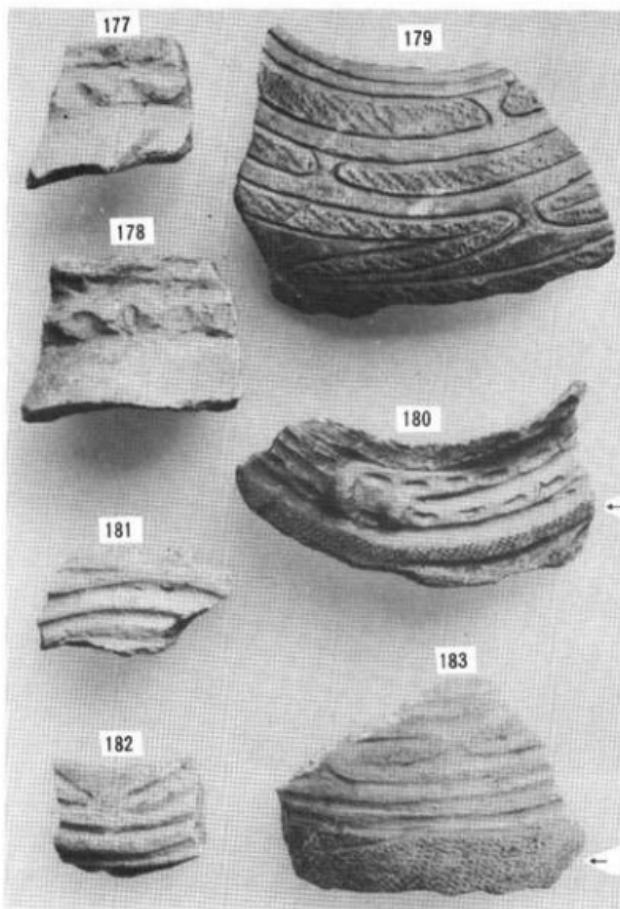
(160は、精製、他は、半精製土器である。)

(161・165)は、口縁が強く外反する細口壺の口頸部であつて小形の壺に多く見られるタイプの一つである。

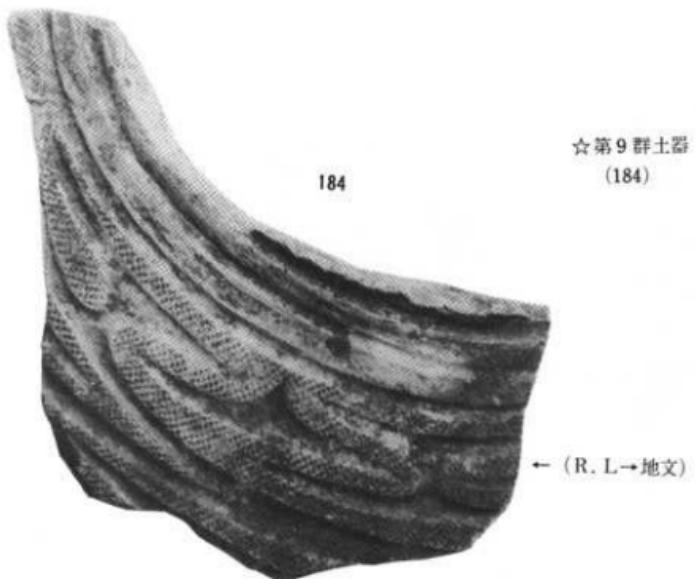
- (161) も、細口壺のものと思われるが口縁が段をなして肥厚するもので 1 タイプである。
  - (162・166) は、[P. L22~146~149] のタイプであろう。また (163) は、平縁で、口縁直下に繩文帯をもつタイプである。
  - (164) は、あまり例が少なく 1 タイプとするには、出土数が少ないものである。
  - (167) は、短頸の壺形土器で、このものは、小形の壺形土器に見られる 1 タイプである。
- ☆ [P. L25のまとめ] ここでは、壺形土器の口頸部の形態や施文によって、五つのタイプと、例外的 (164) タイプを示した。このうち (163) は、口頸部が直立に近い形態をなしており、大洞C2式期の後半から大洞A式にかけてのタイプと思われる。

☆第9群土器  
(168~176)

- ☆ [P. L26] ここに掲げたものも壺形土器の口縁部破片である。大別して3タイプに分けられる。
- (168~171) は、口縁部が内傾するタイプのものであり、(172)は、口唇部に沈線文を有するタイプである。
  - さらに、(173~176) は、壺形土器の頸部に壺形土器を乗せた形態(写38参照)のものである。
  - これらの3タイプは、大洞C2式期の終末から大洞A式に初現するものようである。
  - なお [P. L26] に掲げたものは、精製土器である。

☆第8群土器  
(177・178)☆第9群土器  
(179・180)☆第10群土器  
(181・182・183)

☆〔P. L27〕 ここに掲げたもののうち、(177~178) は、壺形土器の口頸部破片、(179・180・183) は肩部 (180・183)、および胸部 (179) 破片である。  
• (177・178) は、〔P. L22〕 のタイプである。また、(181・182) は、鉢形土器の破片と思われる。沈線文のあり方から大洞A式 (第10群土器) の仲間であろう。



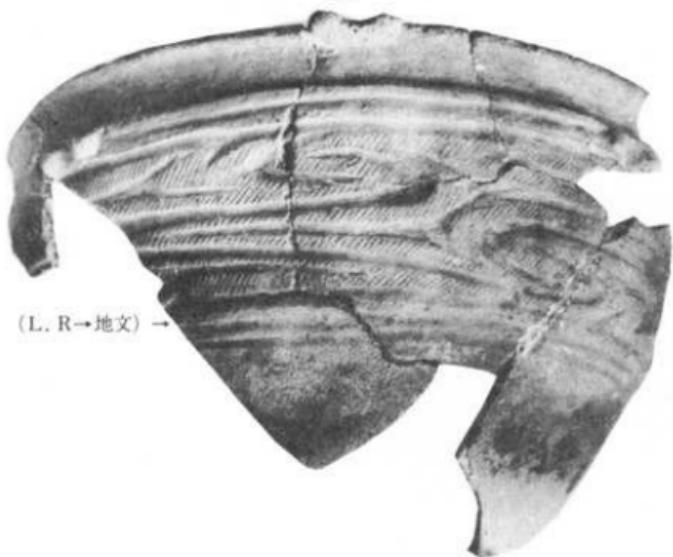
☆ [P. L28] —184は、問題提起の意味で掲げたものである。このものは、大形の壺形土器の胴部破片である。

- ・この胴部における文様帯を眺めると理解されるとおり、入組工字文、または平行工字文が完成していない様相を見せていている。(P. L18-116参照)
- ・すなわち、大洞A式土器ではなく、また純粹に大洞C2式土器の文様でもないのである。この施文パターンを有するもの一群を大洞C2-A式土器として捉えることが可能である。  
(—応仮称して、大洞C2-A式と呼ぶことにする。またこのものは、日の浜式土器の要素も認められる。)

#### ☆ [P. L15~P. L28] のまとめ

- ・ここでは、典型的な、第8群土器(大洞C2式)の壺形土器と、第9群土器(大洞C2~A式→仮称)の壺形土器を示した。また、第10群土器(大洞A式)とした鉢形土器(P. L27-181・182)について簡単にふれた。
- ・また壺形土器の口頸部パターンについて、そのタイプにふれたが、このことは本文を参照されたい。

185

☆第8群土器  
(185)

- C頸→平縁で小突起を有し、頸部が無文帶のもの。

☆ [P. L29]この[P. L29~P. L33]までは、第8群土器(大洞C2式)の鉢形土器で典型的な施文のあるものを一括して掲げたものである。

- この(185)は、平縁で四対の小突起を口縁に貼付し、頸部は、弧状に外反するもので無文帶をなしているものである。
- 肩部より胴部にかけては、磨消手法による典型的な大洞C2式の曲線的な雲形文が施文され、文様帶の下端は、2条の沈線によって縄文帶と区画される。
- 脚下半には、左傾する縄文(L, R)が施文されるもので、この期における鉢形土器の一典型である。

## ☆第8群土器

(186~192)

187



186

(L, R→地文) →



188

(L, R→地文) →



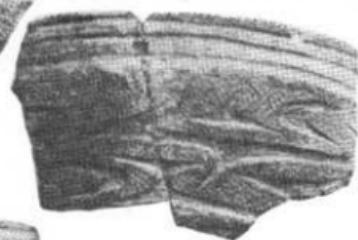
189



- a類→平縁で小突起のないもの
- b類→平縁で小突起のあるもの

(L, R→地文)

190



191

(L, R?)

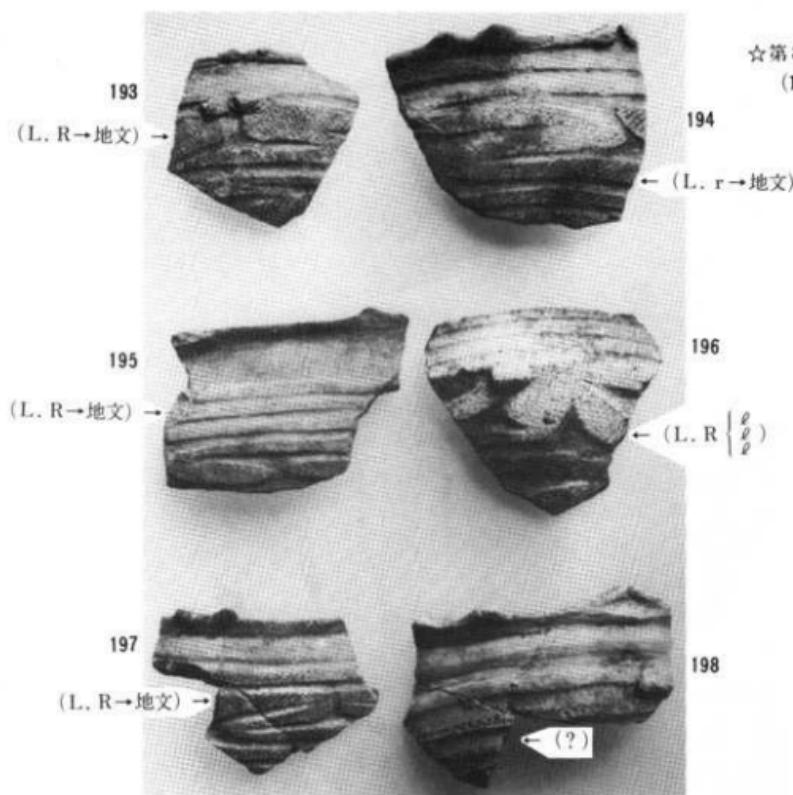
(G<sub>1</sub>-I<sub>b</sub>④)

192



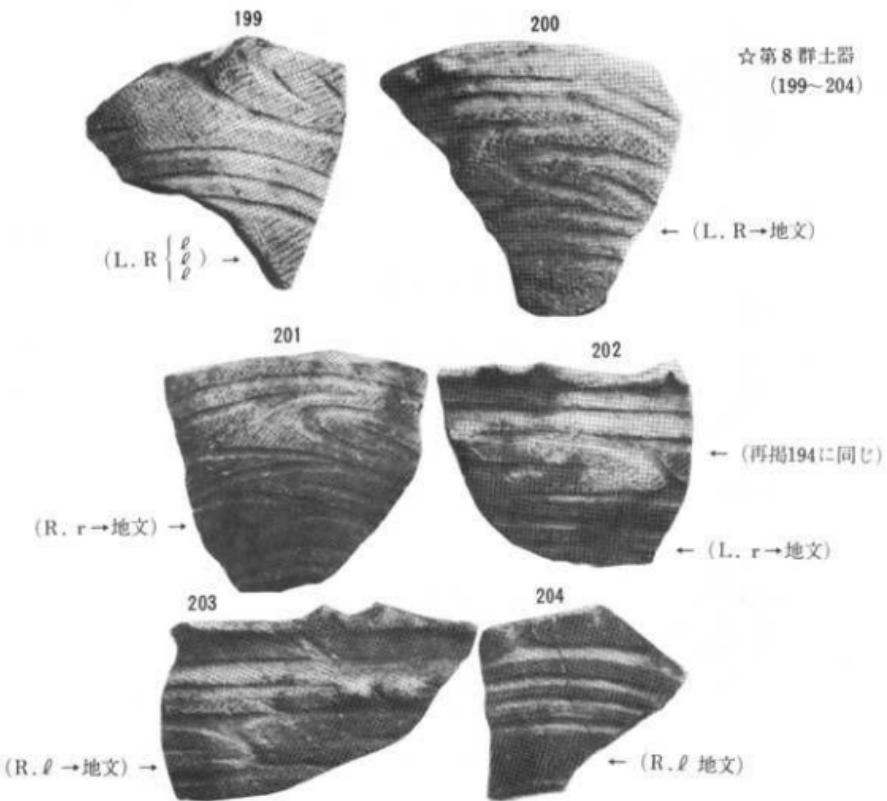
☆〔P. L30〕ここに掲げたものも〔P. L29〕に述べたように第8群土器（大洞C2式）の典型的な施文のある鉢形土器である。器形は〔P. L29〕より全般的に小形である。

- ・これらのもののうち（186~188、190・192）は、平縁で口縁上端に刻目をもつもので、（189・191）は、小突起を口縁上にもつものである。



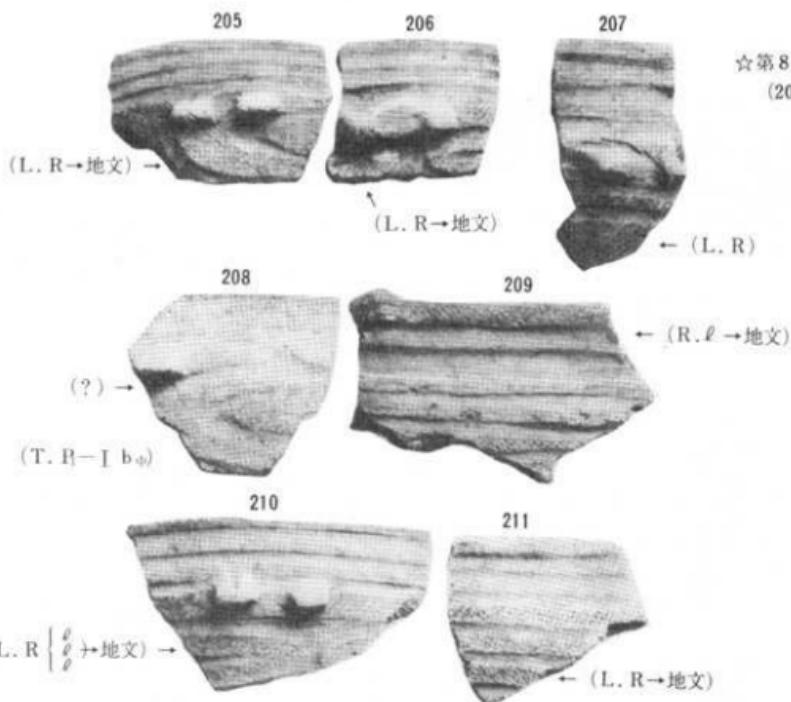
☆ [P. L31] も、第8群土器（大洞C2式）の鉢形土器である。これらのうち、(195)は、頸部が無文帶で[P. L29-185]と同様C類であり、(193・195・197)は、破片で見る限り、やはりC類であろう。

- また、(196)は、口縁上端に刻目を有し、頸部には、3条を基本とした平行沈線文が施文されるa類〔P. L30参照〕の仲間である。
- (194・198)は、b類とした小突起（まる味のある）と共に山型の突起を口縁にもつもので、d類として分類した。



☆〔P. L32〕ここに掲げたものも第8群土器(大洞C 2式)の鉢形土器の破片である。

- ・(199~201・204)は、胴部下半のもので、磨消繩文による典線的雲形文と、文様帯の下端は、2~3条の平行沈線文によって、下部の繩文帯と区画されるものである。また、(203)は、〔P. L31〕で述べたd類の仲間であろう。
- ・なお、胴部下端の繩文帯は、左傾するL, R繩文が多く、縦位のもの、右傾するものは、少数である。なお(204)は、右傾と縦位に施文される(L, R, R, ℓ)繩文である。

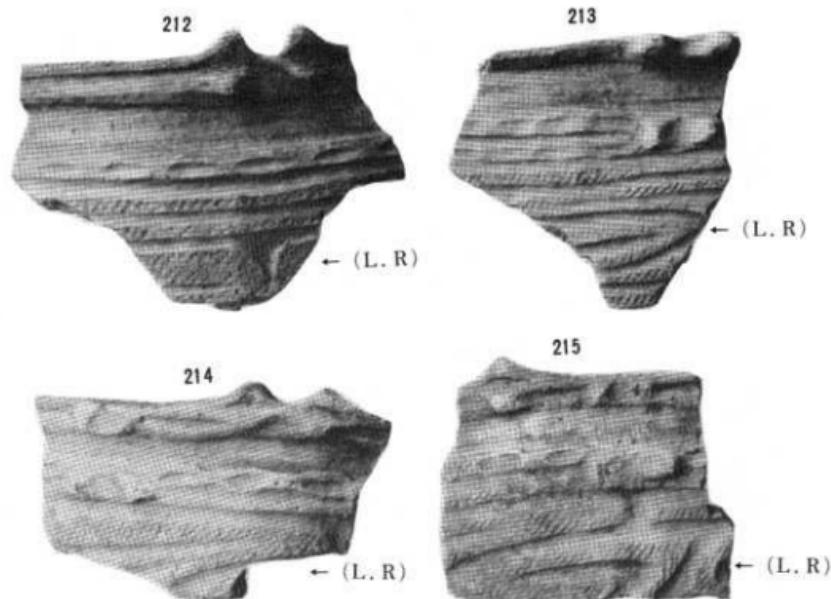


☆ [P. L33] ここに示したものも第8群土器(大洞C 2式)の鉢形土器を掲げたものである。

- (205~207) は、[P. L30]で述べた a 類の仲間と思われるが口縁上端に刻目がないものである。
- (208~210) は、a 類である。(209~211) は、a・b 類に比して、器厚が厚く、且つ、口縁上端部が肥厚し、縄文がその上に施文されるもので e 類として分類した。

☆なお、地文として施文される縄文のうち、(P. L31~194、P. L32~203、P. L33~207~210) は、0段多条のR,L縄文が左傾するものである。他は、すべてL,Rである。

## ☆第9群土器 (212~215)



☆ [P. L 34] この [P. L 34~P. L 45] に掲げた (212~294) の土器群は、本遺跡を特徴づける土器群である。これらの土器群を一括して第9群土器 (大洞C 2-A式→仮称) として分類したものである。

これらの土器群は、大洞C 2式期の後半よりA式に至る過渡期の特徴をもつものである。

- (212~215) に共通している点は、①口縁部が複合化していること、②口縁上端部に縄文が施文されていること、③頸部が無文帶であること、④肩部に横列の押圧文があること、等の特徴があることである。

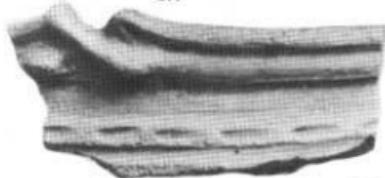
- また、肩部より胴部へかけての施文は、(213~215) のように、その雲形文がまだ曲線的で大洞C 2式土器の要素を残している。また、(212) も多分同様であろう。

216

☆第9群土器  
(216~219)

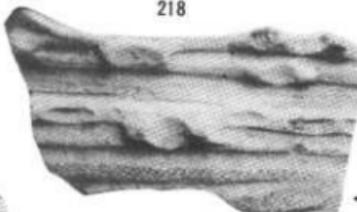
← (L, R)

217



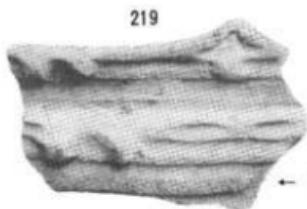
(L, R)

218



← (L, R)

219

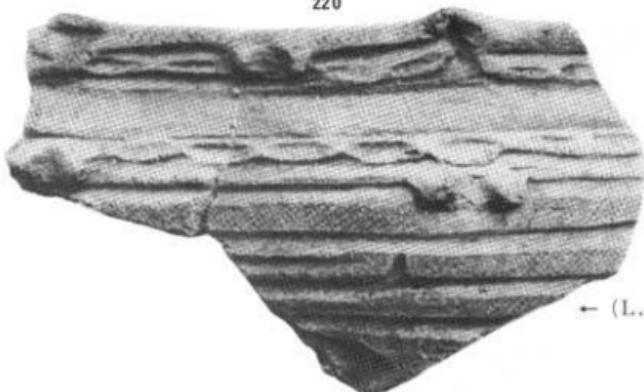


← (L, R)

☆ [P. L35] ここに示したものも大形の深鉢形土器である。いずれも [P. L34] に述べた①~④の特徴をもつものである。

- 特に、(216) にみられるように、胸部文様の入組工字文が未完成で、つぎの大洞A式にみられるような単位文様が完成していないことがわかる文様である。
- (216~219) は、いずれも第9群とした大洞C 2-A式(仮称)土器である。

220

☆第9群土器  
(220~221)

← (L, R)

221

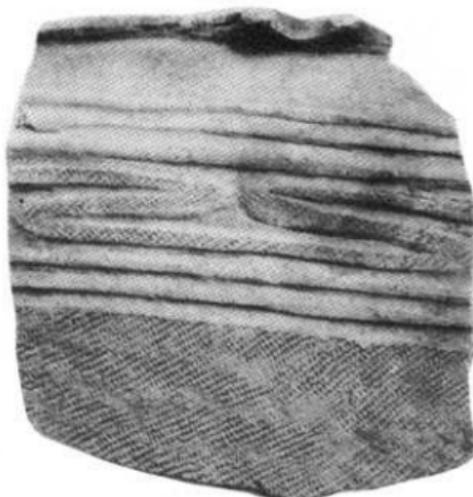


← (L, R)

☆ [P. L.36] この(220・221)も、第9群として分類した大洞C 2-A式(仮称)とした過渡期の深鉢形土器である。これらの土器は、[P. L.34]で述べた①~④の特徴を有し、また胴部文様もまた、[P. L.35-216]と同様に、入組工字文が未完成のものである。

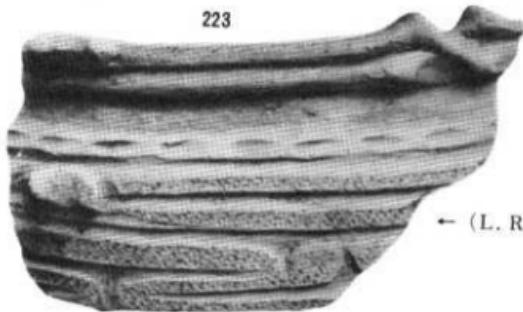
・なお、地文の縄文は、(220)は、左傾する0段多条のL.R.(221)も同様である。

222

☆第9群土器  
(222・223)

← (L. R)

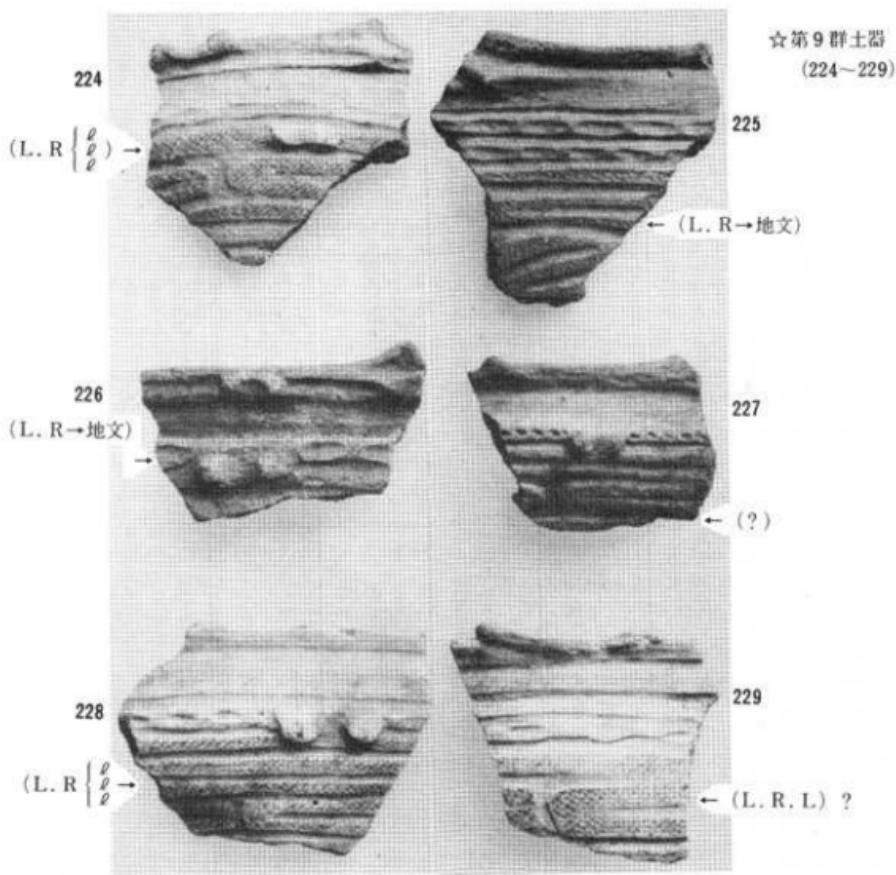
223



← (L. R)

☆ [P. L37] この2片も第9群とした大洞C 2-A式(仮称)の大形深鉢土器である。(223)は、  
〔P. L36-221〕と同様の施文である。

- (222)は、口頸部の無文帯が広く、胴部の文様がほぼ完成した入組工字文を見せている。この整理された入組み工字文を見るとつぎの第10群土器とも思われるが、このものには、口唇部に沈線文がないのでこの群の土器とした。



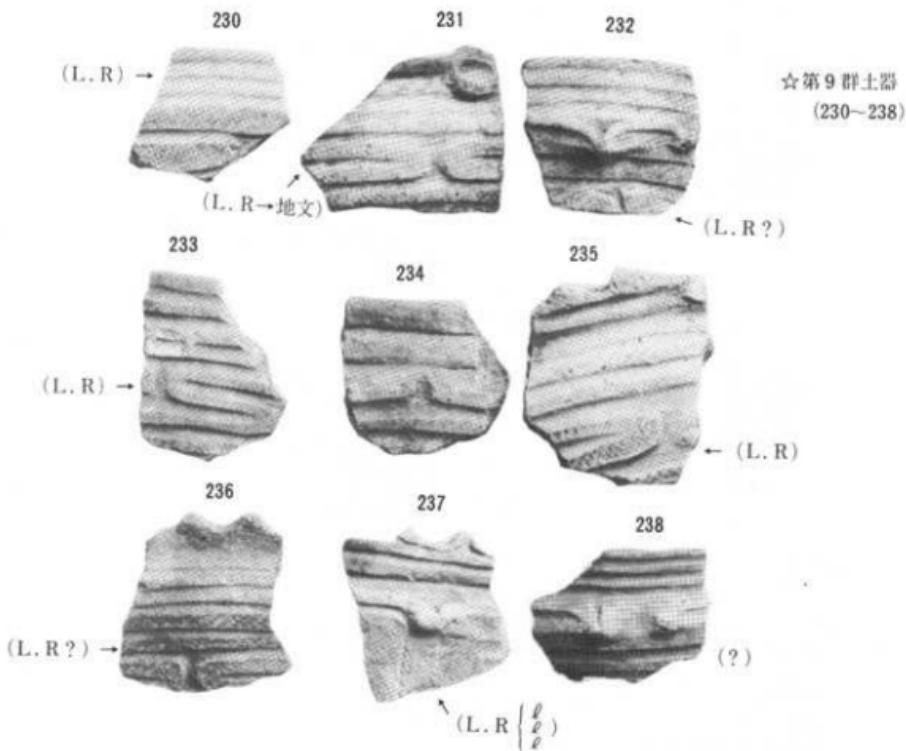
☆ [P. L.38] ここに掲げたものも第9群土器の深鉢形土器である。すなわち [P. L.34] —①—

④にのべた諸特徴を有するものである。

・このうち、(225) は、胎土、焼成ともきわめて良く堅緻なものである。また、(227) の横位に

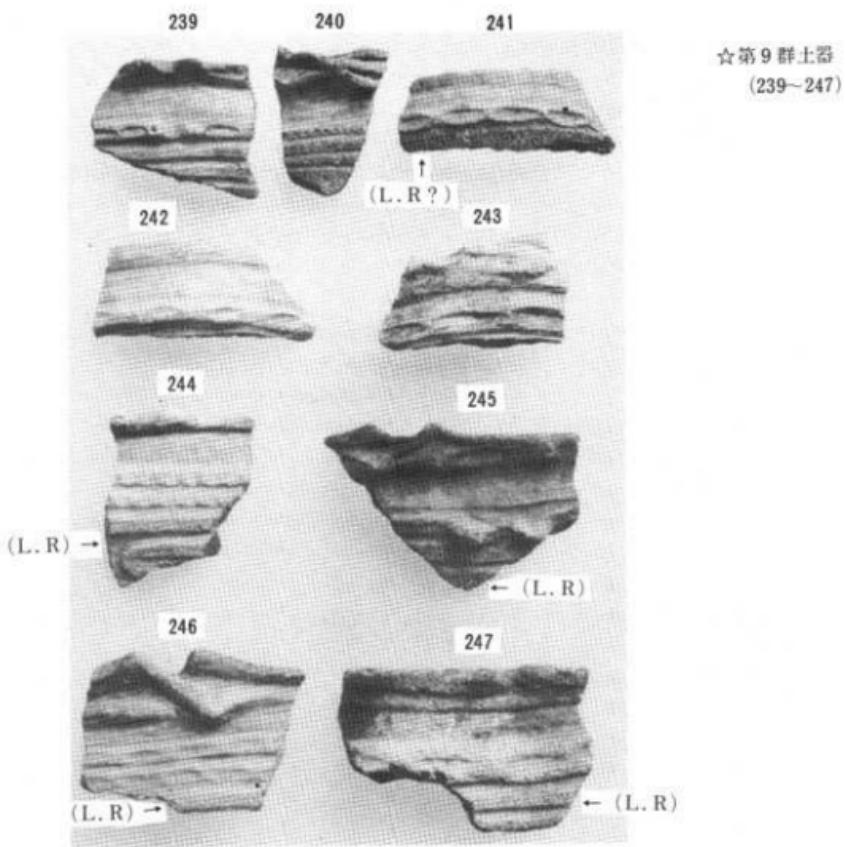
施された押圧列点文は小さいものである。

・入組工字文は、かなり平行線が直線化しているものである。(224・227~229)



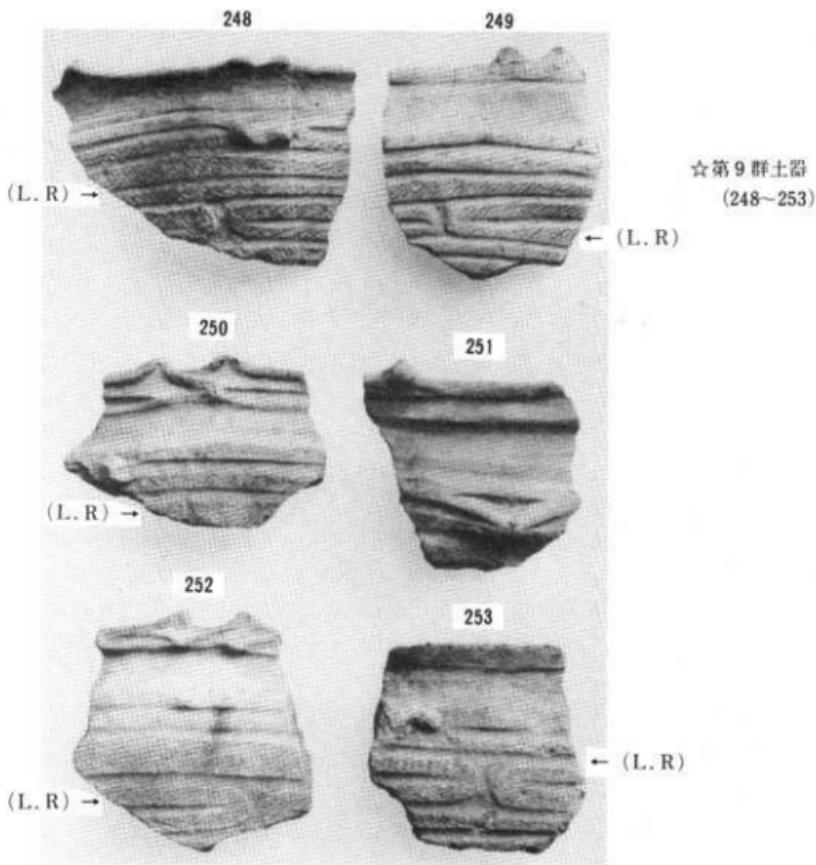
☆〔P. L39〕ここに示したものも第9群土器(大洞C2-A式→仮称)の小形の深鉢形土器破片である。これらの破片のうち、(230・232~234・238)は、平縁で、口頸部には、3条を基本とした沈線文が施文される。(但し、234は2条)、(231・235~237)は、口縁に小突起を有し、(231は、ボタン状)、頸部には無文帯をもつものである。すなわち前者は、大洞C2式の要素を大きくみせている。

- ・肩部下の施文は、入組み工字文をみせるものである。また、(232・237・238)には、三角形状突起が大小2ごとに對つけられ、そのうち大きい方の左側には山形刺突文がつけられる。



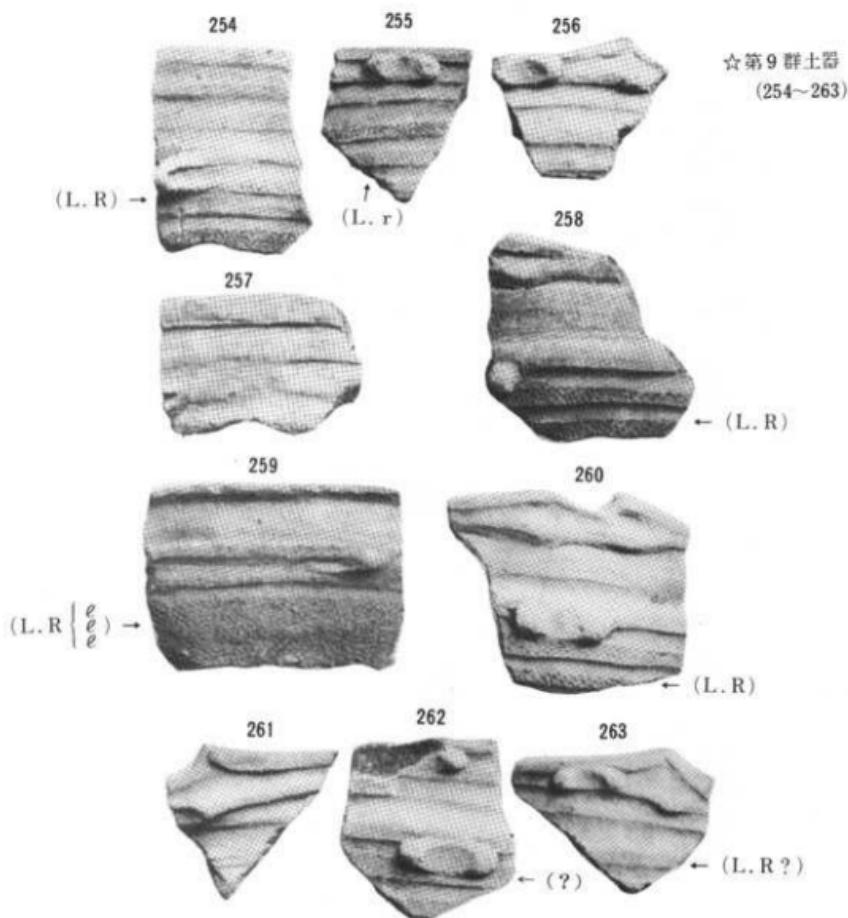
☆ [P. L40] ここに掲示したのも小形の深鉢形土器および浅鉢形土器である。いずれも第9群土器の仲間（大洞C 2-A式→仮称）である。

- このうち（239・240、243~247）は、複合口縁で小突起をもち、横位の押圧文、または、列点文を1~2段施文されるものである。
- （241・242）は平縁である。いずれも頸部に無文帯があり、また、その器形から見て浅鉢かも知れない。口縁上端には、押圧撓糸文が施文されるもの（244~247）もある。



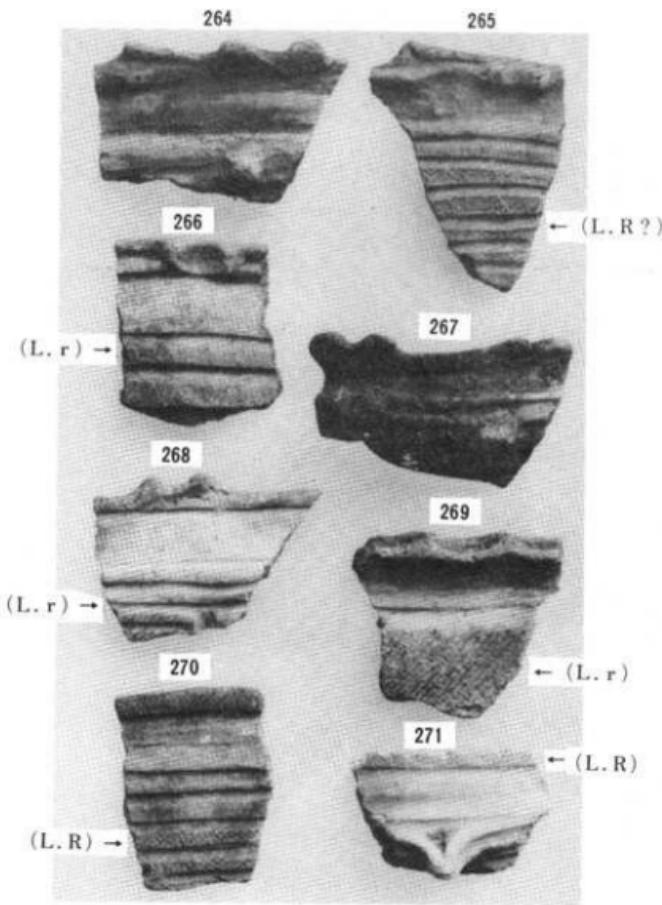
☆〔P. L41〕ここに掲げたものも第9群土器(大洞C 2-A式→仮称)の深鉢形土器である。

- ・このうち(248・249)の口縁上の小突起は、(250~252)の1対の山形突起と組合って交互に四対ずつつけられるものもある。
- ・(251)は、肩部に山形の突起をもつもので、この形態の突起は、つぎの大洞A式に定着するものであるが、この期に初現するものであろう。



☆ [P. L42] ここに掲げたものも第9群土器とした (大洞C 2-A式→仮称) の深鉢形土器である。

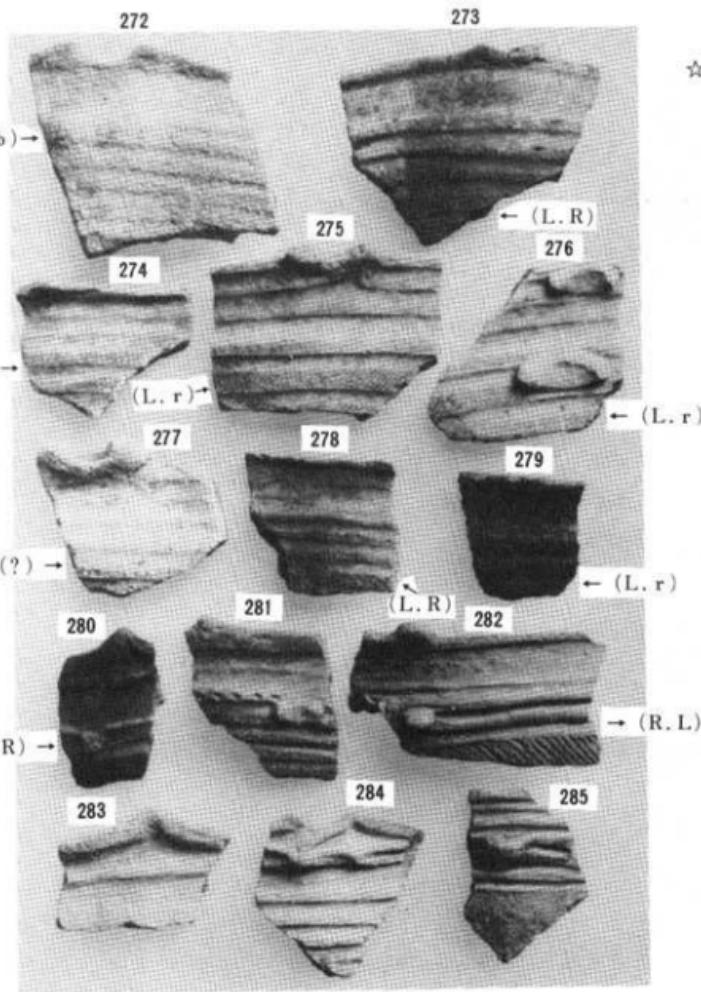
- 平縁のもの (254・255・257・259) で、他は、山形突起を有するものである。なお (259) は、主文様がなく胴部は縄文 (L, R) が密に施文される粗製土器である。



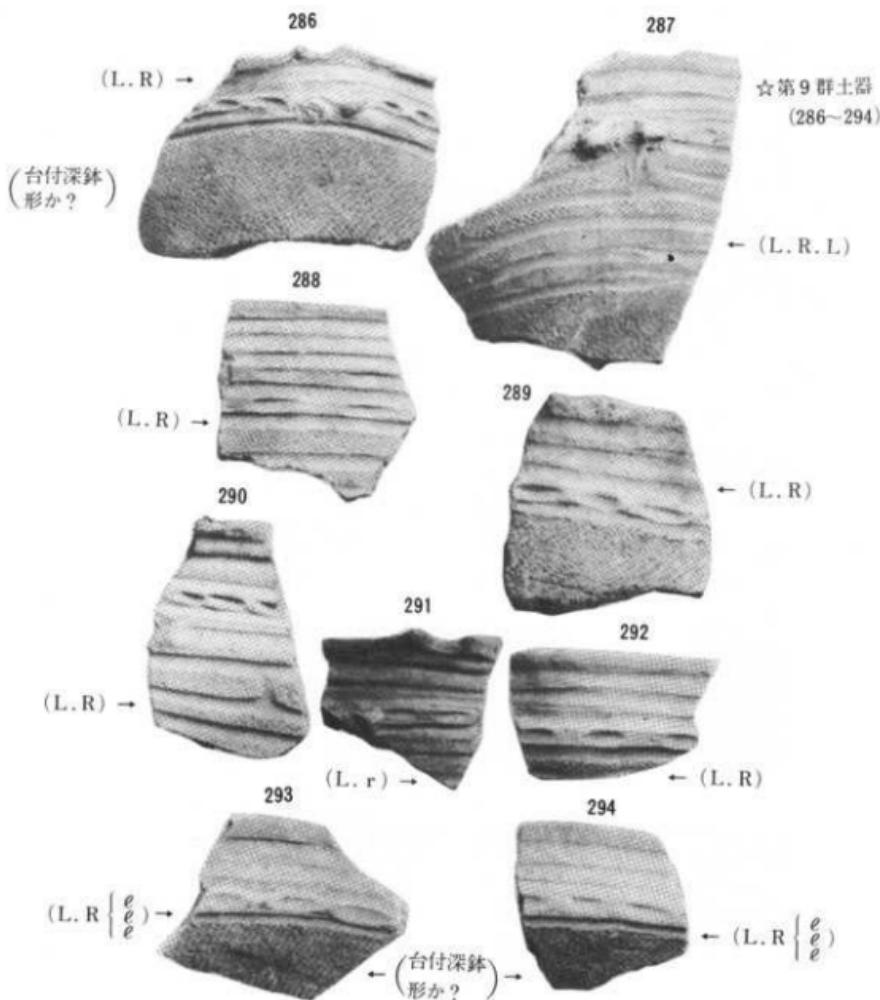
☆第9群土器  
(264~271)

☆ [P. L43] このものも第9群土器とした（大洞C 2-A式→仮称）の鉢形土器片である。

- (266・270・271)は、平縁のものと思われる。また、他のものは、小突起を口縁にもつものであるが(267)は、山形突起と異なる大小二種の突起を口縁につけているものである。
- なお(269)は、外反する口縁とその口唇部に沈線文がつけられるもので粗製土器である。

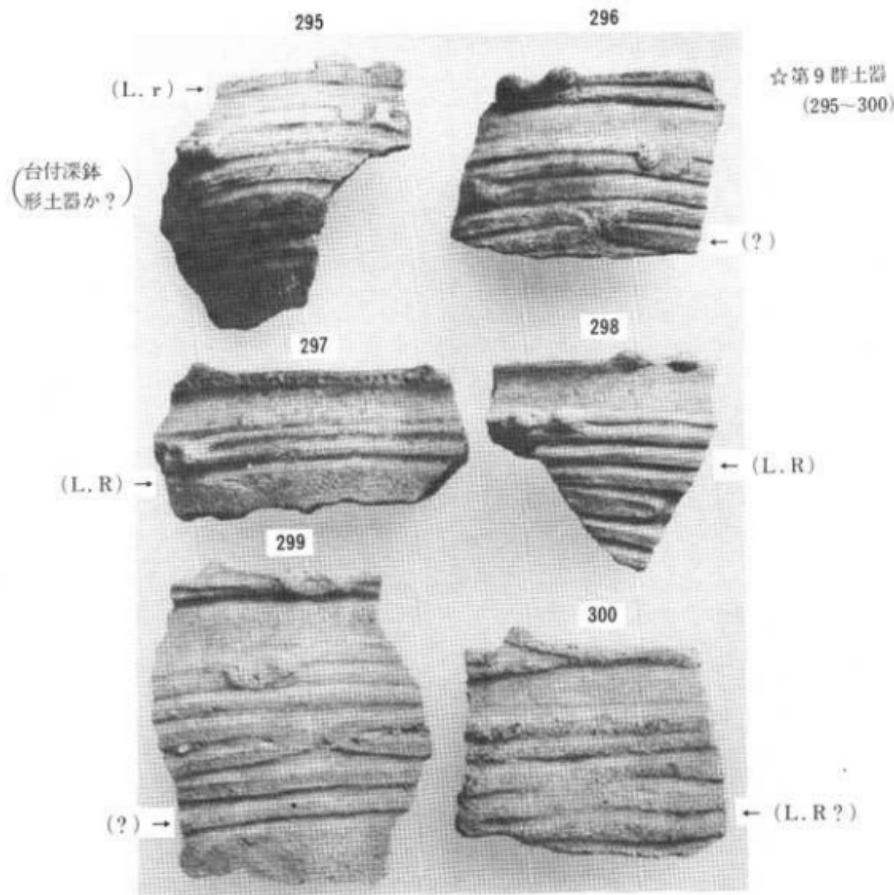
☆第9群土器  
(272~285)

☆ [P. L44] ここに掲げたものも第9群土器(大洞C 2-A式→仮称)の深鉢形土器片である。  
• このうち(272)は、G 1 - I b中層出土で風化しているものである。他は、今まで述べてきたものと同様であるが(282)は、胴部の縄文が右傾するもので半精製土器である。この右傾する縄文(R, L)の施文されるものは少ない。



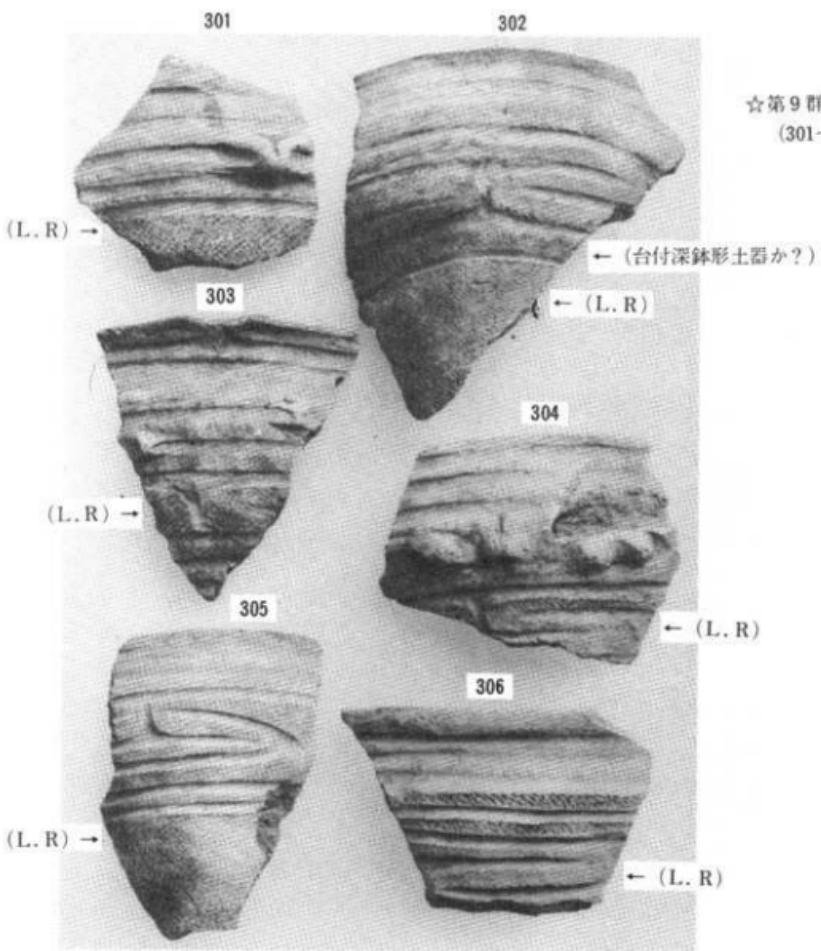
☆ [P. L45] ここに掲げたものも第9群土器（大洞C 2-A式→仮称）の深鉢形土器である。

- このうち (286) は、肩部が張り、頸部が内傾する器形のものであり、(293・294) は、肩部が急に張り、頸部が内傾するものである。また、(286・289・293・294) は、口頸部にのみ施文があり、胴部は左傾する縦文が施文される半精製土器である。



☆ [P. L46] ここに掲げたものも第9群土器(大洞C 2-A式→仮称)の鉢形土器である。このうち(295)は、胴上部がふくらみの強い深鉢形であり、また、(297)は、肩部に突出する山形突起を持つものである。(粗製土器)

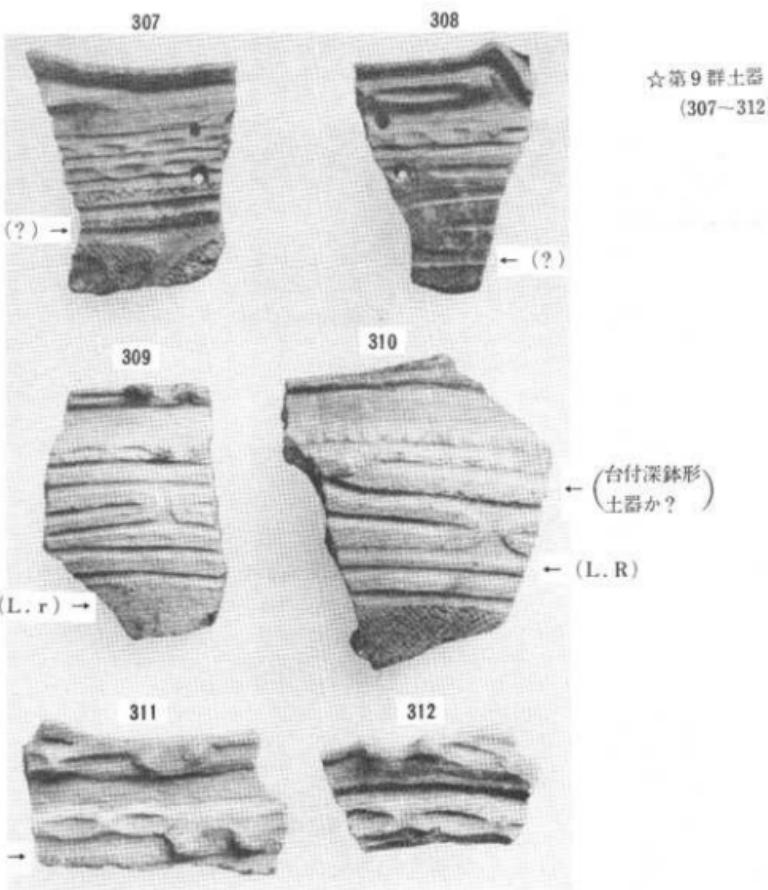
- ・他の。(296・298~300)は、入組工字文が、かなり整って平行工字文的になるもので、[P. L35~316・P. L36~221]と比べると、理解されるように多分に大洞A式の主文様に近づいているものである。



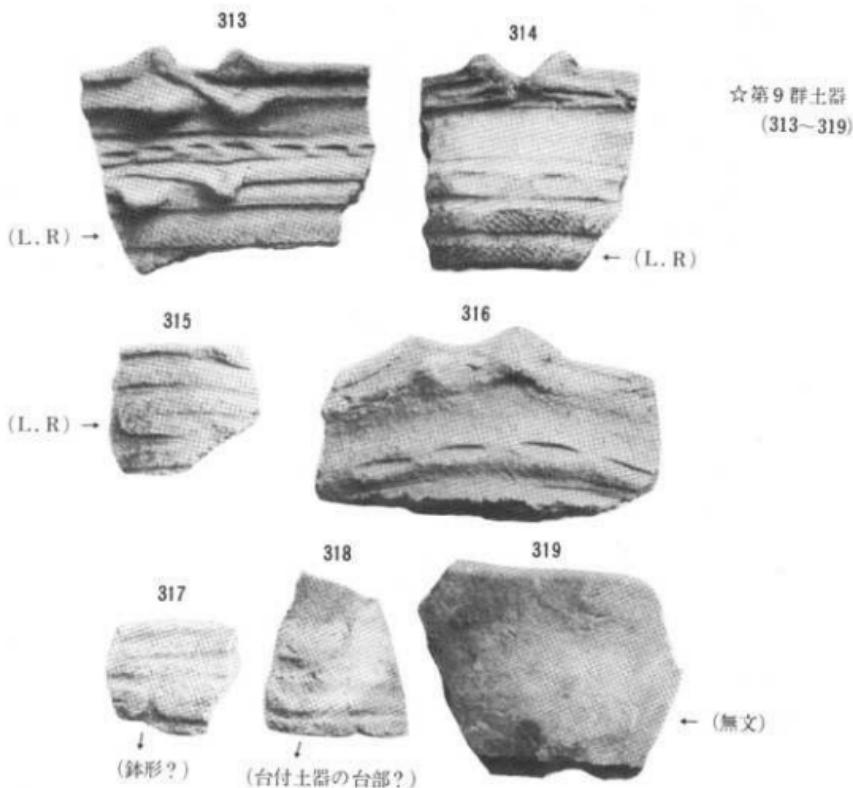
☆第9群土器  
(301~306)

☆ [P. L47] このものも第9群土器(大洞C 2-A式→仮称)の深鉢形土器である。(302は台付深鉢形土器か?)

- ・口頭部の形態・施文を見ると、平縁で(301・302、304~306)、頭部には、浅い平行沈線文が施文される(2~3条)。また、(303)も口縁は小波状を呈するが頭部は同様に沈線文がある。すなわち、大洞C 2式の要素が強く残る。これ故第9群でも新しい位置のものであろう。



☆ [P. L48] ここに示した6片も、第9群土器（大洞C 2-A式→仮称）の深鉢形土器である。  
 (311・312)は、口縁部破片、(307・308)は、それぞれ2この修理孔のあるもので、胎土・焼成とも良く堅緻なものである。  
 • (309・310)は、第9群というよりも第10群土器に近いもので、口唇部に沈線文が施文されるものである。



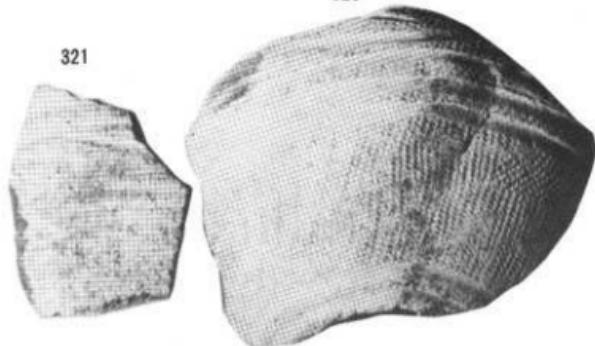
☆ [P. L49] ここに示したもののうち、(313・314) は、深鉢形土器の口頸部破片、(315・317・

318) は小形深鉢形土器である。(318は、台部の可能性もある。)

• (316) は器厚のきわめて厚い粗製の深鉢形土器である。

• (313~318) は、第9群土器、(319) は、無文の深鉢形土器であるが第8~第9群土器の仲間であろう。(製塩土器の疑いがある。)

320



321



322



323



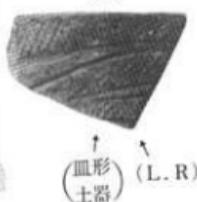
☆第7群土器  
(324)

☆第8群土器  
(320~323・325・326)

(L, R)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{e} \\ \text{e} \end{array} \right\} \rightarrow$   
(皿形土器)



325



326

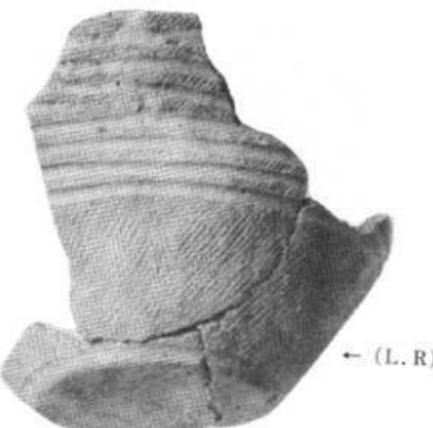


← (L, R)

☆ [P. L 50] ここに掲げたもののうち (324・325) は、それぞれ第7群 (大洞C 1式)、第8群 (大洞C 2式) 土器で、両者とも皿形土器である。  
・他は、第8群土器 (大洞C 2式) の深鉢形土器胴部である。

☆第9群土器 (327~328)

328



327



(L, R) →

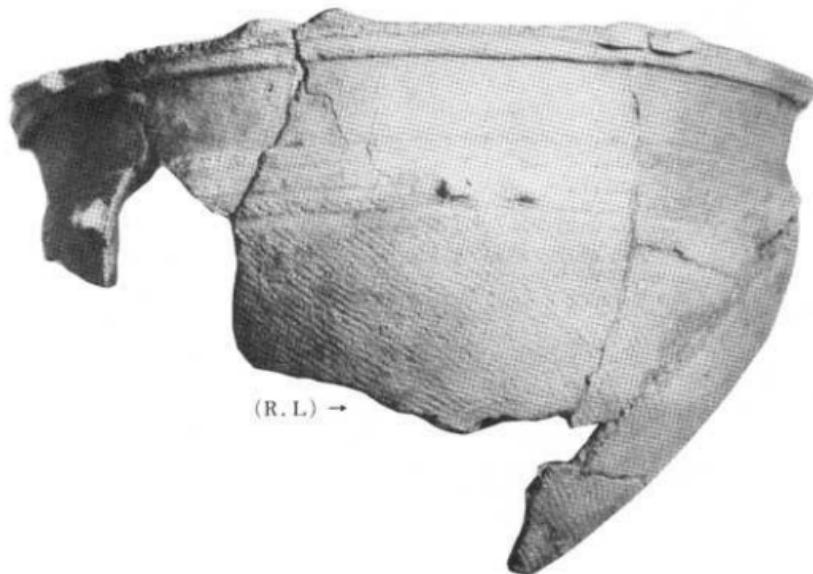
☆ [P. L51] ここに掲げたものは、第9群土器（大洞C 2-A式→仮称）の胴下部、および底部である。(327・328) とも平行沈線文と入組工字文が施されるもので縄文は左傾するものである。(第10群の可能性もあるが一応第9群土器とした。)

## ☆ [第9群土器のまとめ]

- [P. L34] で記したように、鉢形土器の諸特徴は、①~④に述べたとおりである。また、地文とされる縄文は、左傾するL, Rが最も多く、ごく少数のR, Lが見られ、このものは右傾する。また、L, R, L(複節)も少數認められる。さらにL, R { } →すなわち、0段多条のものも認められる。
- 施文を見ると、大洞C 2式の要素を強く残すもの、入組工字文の未完成のもの、および、入組工字文がほぼ完成するものの3段階が観察される。

☆第8群土器 (329)

329



☆ [P. L.52] ここに掲げた (329) は、第8群土器 (大洞C 2式) の後半以降に出現する鉢形土器の一典型である。

- 大洞C 2式鉢形土器の最も一般的な器形は、[写3・4・5・6]に示した器形であるが、(329)は、口縁は平縁で、口唇部に押圧燃系文が施文され口縁上部は、段をなして肥厚するものである。
- また頬部は、無文帯をなし、肩部には3条を基本とする平行沈線文が施文される。肩部は、ふくらみを持ち斜行して底部に達する器形で底面の径は、小さいものである。
- 口縁には、やや外反する2こ1対の山型突起4対と、その中間に、前方にセリ出る粘土粒2ヶ1対が4対付される。
- 胎部には右傾する (R. L.) 繩文が密に施文される半精製鉢形土器である。

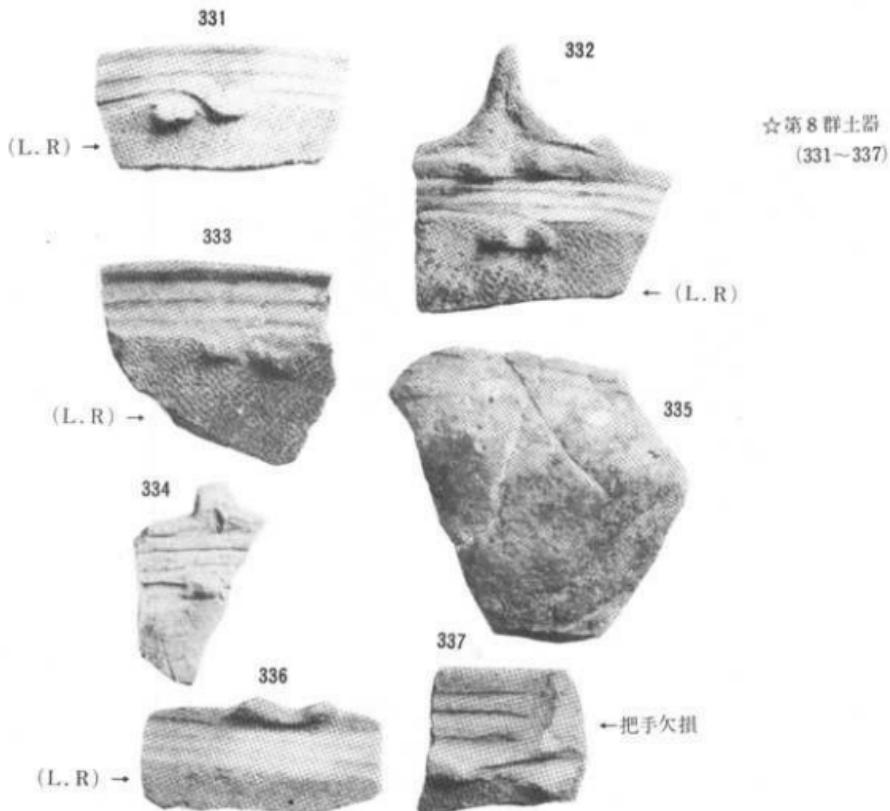
330



☆第8群土器  
(330)

☆ [P. L53] この (330) も第8群土器 (大洞C 2式) の鉢形土器である。(粗製土器)

- ・このものも、[P. L52-329] と同様大洞C 2式期の後半に出現する一タイプである。平縁で頸部が無文帯をなし、肩部には、2条の沈線文がめぐらしている。また、胴部には、左傾する縄文 (L.R) が底部まで施文されるものである。
- ・この (330) は、[P. L52-329] と比較するとわかるとおり、口縁部の突起が省略され、肩部の沈線も2条である。胎土、焼成とも前者より悪いものである。



★〔P. L.54〕ここに掲げたものは、いずれも第8群土器（大洞C2式）の鉢形土器破片である。

(331・333)は平縁、(332・334)は、波状口縁で突起を口縁に持つものである。なお(334)は胴部に条痕文が施文される。

- また、(336)は、平縁に小突起をもつもの、(337)は平縁とも思われるが不明である。さらに(335)は無文の胴部で粗製土器である。
- (335)を除く(331~333、336・337)は、半精製土器である。

338



☆第8群土器  
(338・339)

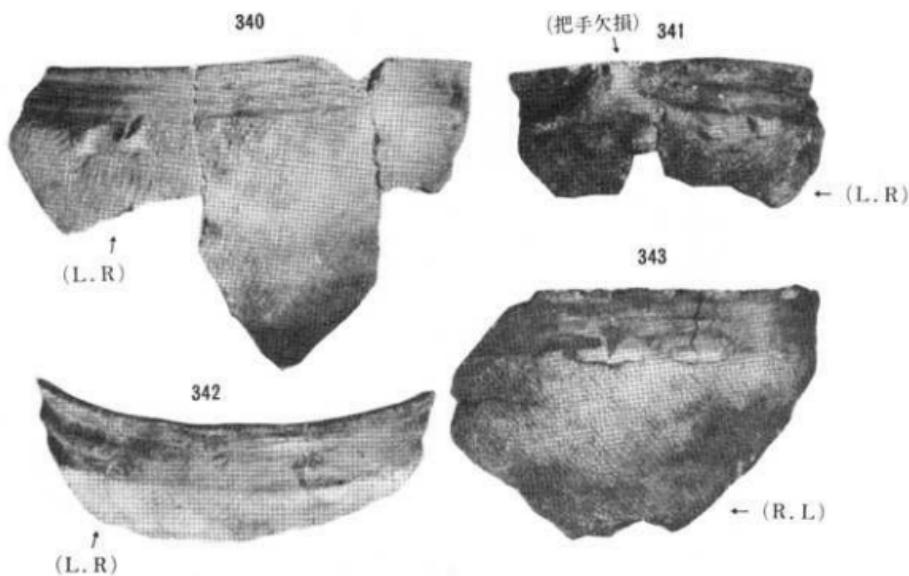
339



☆ [P. L55] ここに掲げた (338・339) は、同一個体のものである。器形と器面のカーブから台付鉢形土器として分類した。

- このものは、外側にせり出る小突起と、ごく低い山型突起を交互に口縁に付けるもので、頸部には、2条の沈線文をもち、肩部より胴部には、左傾する (L, R) 繩文が施文される粗製台付鉢形土器と思われる。

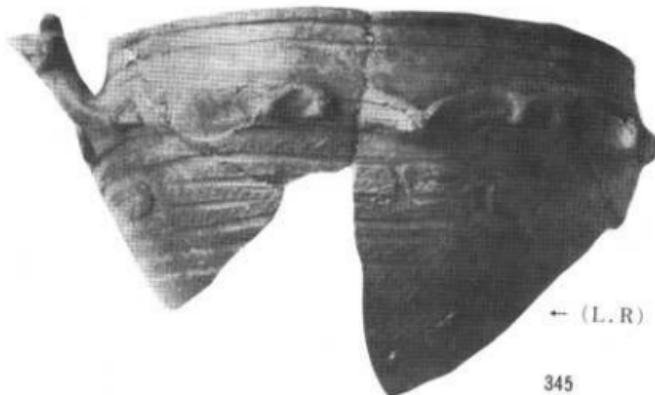
☆第8群土器 (340~343)



☆ [P. L56] ここに掲げたもののうち、(340・341) は、第8群土器（大洞C2式）の粗製鉢形土器である。また、(342・343) は、同じく第8群土器の台付鉢形土器と思われる。（粗製）

- このうち、(341) は、把手付鉢形土器である。既に述べたようにいずれも粗製土器であるが、施文される繩文は、(340~342) は、左傾する二段単節（L.R.）繩文である。
  - また (343) は、同じく二段単節（R.L.）繩文であって、条の方向は、右傾するものである。
- ☆特に留意すべきは、(L.R.) 繩文は、左傾し、(R.L.) 繩文は右傾することである。本遺跡においては、(L.R.) 繩文は、すべての器形にわたって大多数を占めており、(R.L.) 繩文は、各器種において、ごく少数であり、右傾する。
- ☆この (L.R.) 繩文の条が常に左傾すること、および (R.L.) 繩文が右傾するということは、施文方向が常に一定であるという（左から右へ、右から左へ）ことである。

344



(L, R)

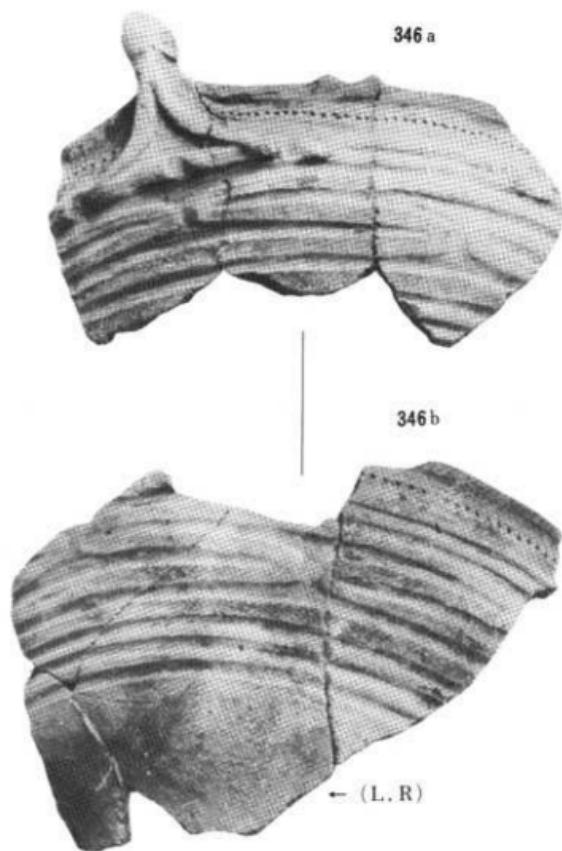
345



(L, R)

☆ [P. L57] ここに掲げた (344・345) は、第10群土器（大洞A式）の台付鉢形土器 (344)、および鉢形土器 (345) である。

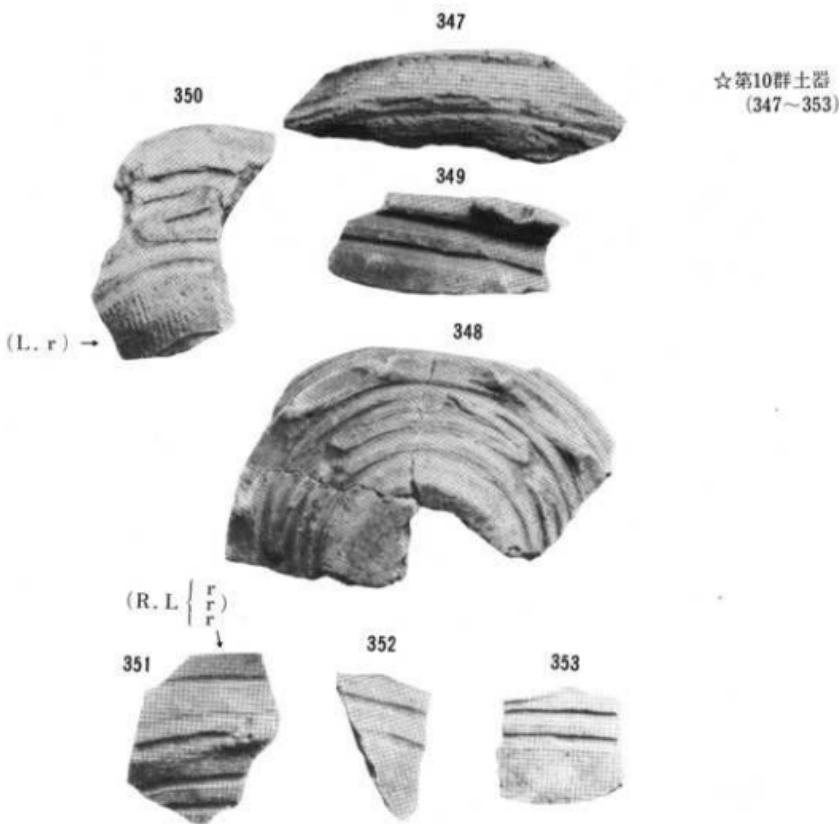
- (344) は、平縁で、頸部には3条の沈線文が施文され、肩部には把手が1つ付けられるものである。また、その肩部には、前面に突出する山型突起と低い粘土粒を2つ1対ずつ山型突起の左右に配し、その間を沈線文で連結する手法である。さらに胴部の上方に2条の沈線、下部にも2条の沈線をめぐらし、その間に完成された入組工字文を施文し、胴下半には、左傾する (L, R) 繩文が施文されているものである。(地文も同様)
- (345) も、平縁で施文は同様手法であり、両者とも精製土器である。
- この (344・345) の施文および突起形態は、大洞A式土器の典型的なパターンの一つである。



☆第10群土器  
(346 a · 346 b)

☆〔P. L.58〕この(346 a · 346 b)は、第10群土器(大洞A式)の粗製台付鉢形土器と思われるが台部は不明である。

・このものは、口線上端部に縄文帯をめぐらし、頸部には、2条の沈線文とその間に列点文を横位に1段めぐらしている。また、肩部より胴部上半には、完成された入組工字文が施文され、3条の沈線文によって区画された胴下半部には、(L. R.) 縄文が左傾するものである。



☆〔P. L59〕ここに掲げたものはいずれも第10群土器(大洞A式)である。そのうち、(347~350)は、浅鉢形土器、(351~353)は、皿形土器片である。いずれも精製土器で、このうち(349·351~353)は、朱ぬりの痕跡を残している。

- (347)は、肩部に横位の押圧文が1列に施文され、(348·350)は、その胸部に入組工字文が施文されるものである。
- (349)は、朱ぬり痕をもち、口唇部に沈線文が施文されるもので、台付浅鉢形土器の可能性もある。
- また、(351~353)は、それぞれ口縁上端の縄文帯と小突起・口唇部の沈線文等から第10群土器(大洞A式)のものとした。

354

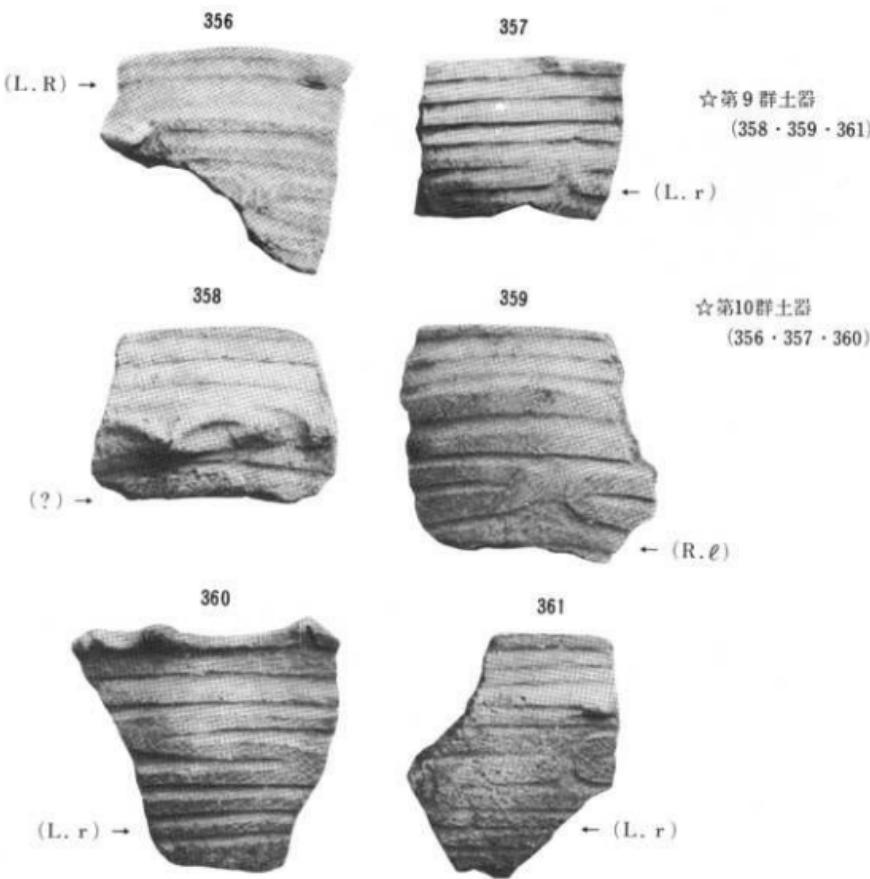
☆第10群土器  
(354・355)

355



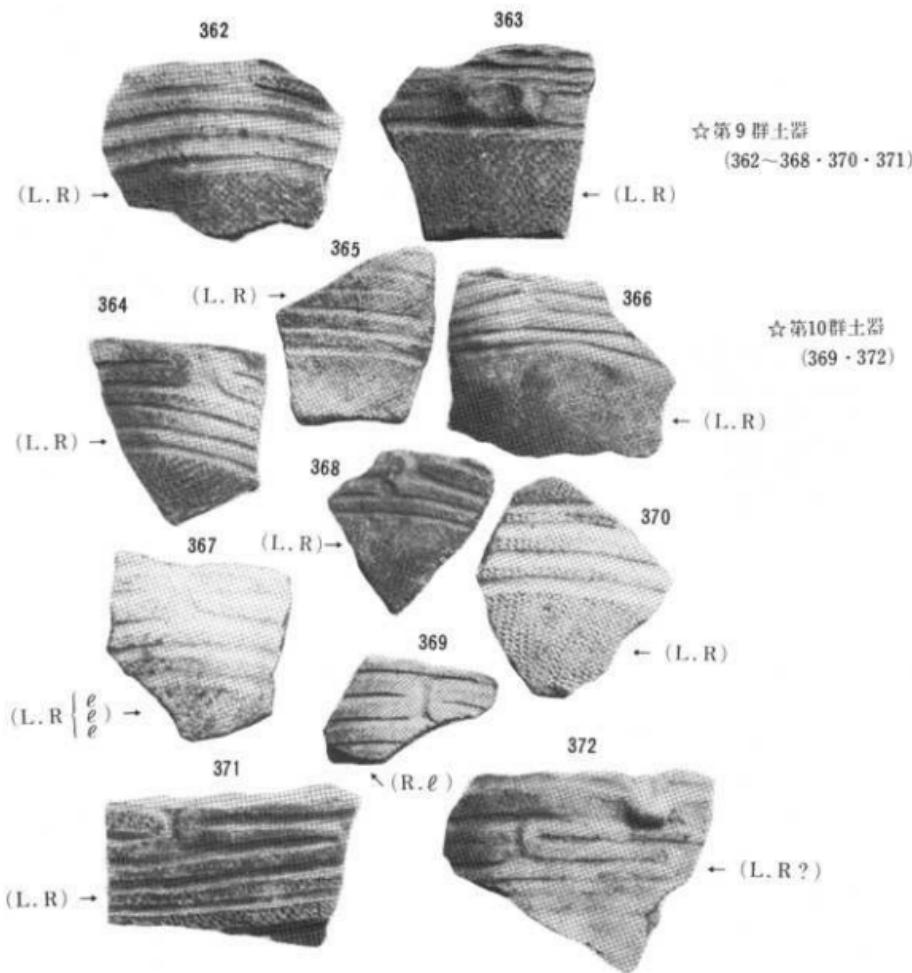
☆ [P. L 60] ここに掲げた (354・355) は、いずれも第10群土器（大洞A式）の深鉢形土器である。

- (354) は、大形の精製深鉢形土器であり、口縁には、低い山形突起をもち、口唇部には、浅い沈線文が施文され突起間を連結している。
- 頸部には、平行工字文と長い押圧文のある隆帯を一定間隔で付し、肩部と胴部へかけては、列点文状の押圧文と入組工字文が施文される。
- 胴部下半には、左傾する (R, ℓ) 摨糸文が不規則に施文されるものである。
- (355) は、口縁に山形突起をもち、口唇部に沈線文が施文されている。頸部は無文帯をなし、肩部には、2こ1対の粘土粒を付し、胴部には摢糸文(L, r)を地文に入組工字文が施文される。また、器内面には、2条の沈線文がめぐるものである。



☆〔P. L61〕ここに掲げたものは、第9群土器（大洞C 2-A式→仮称）の小形深鉢形土器、および、第10群土器の小形深鉢形土器として分類したものである。（いずれも精製土器である。）

- ・このうち（358・359・361）は、口縁上端内側が斜めにそぐようにうすく1条の浅い沈線文をめぐらすもので、頸部には、3条の沈線文が施文される。これは、第8群土器（大洞C 2式）の名残りをとどめるものであり、胴部にはほぼ完成された入組工字文が施文されるものである。
- ・（356・357・360）は、口頸部文様、胴部文様および、器内面に1~2条の沈線文を有するもので、第10群土器（大洞A式）の小形深鉢形土器である。



☆ [P. L62] ここに掲げたものは、いずれも肩部下より胴部下半にかけての破片である。このうち (364・366・371) は、精製他は、粗製土器である。

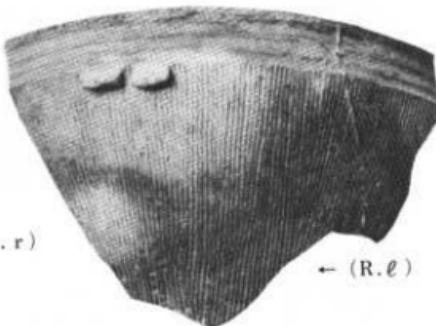
- いずれも鉢形または深鉢形土器の破片であろう。このうち、(369・372) は、第10群土器（大洞A式）のものであろう。他は、第9群土器（大洞C 2-A式→仮称）のものと思われるが断定は控えたい。

## ☆第8群土器 (373・374)

373

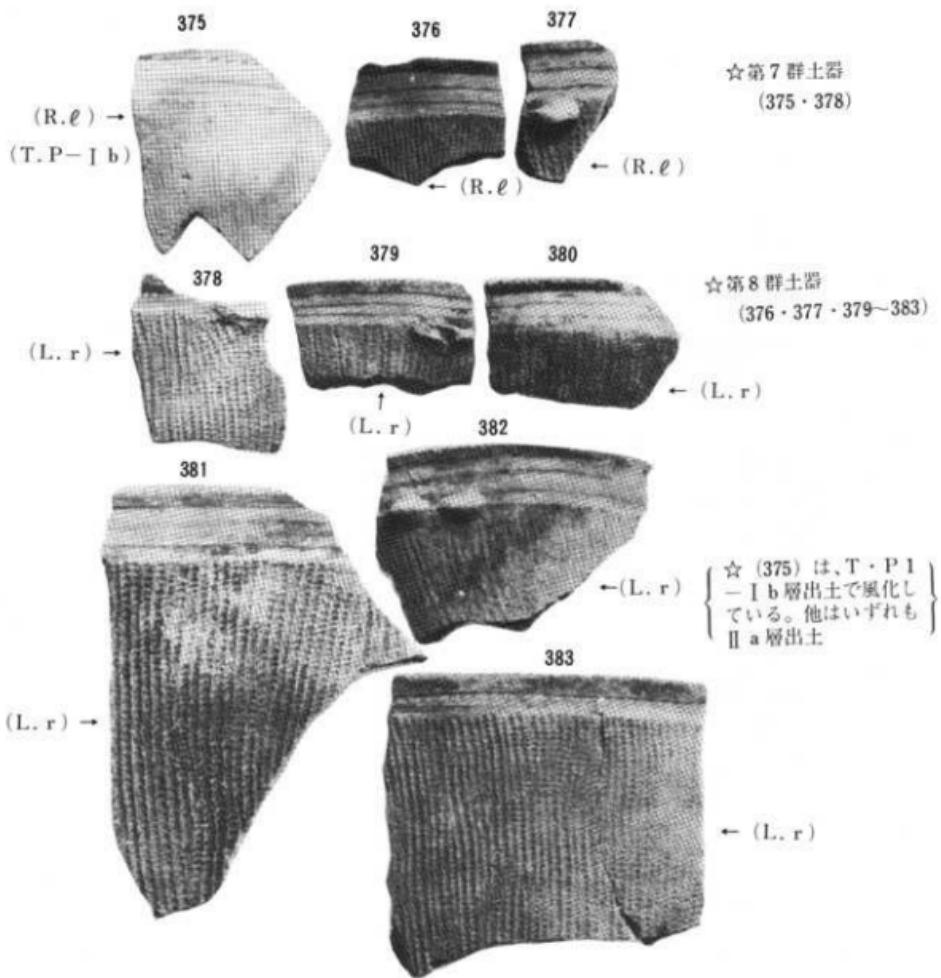


374



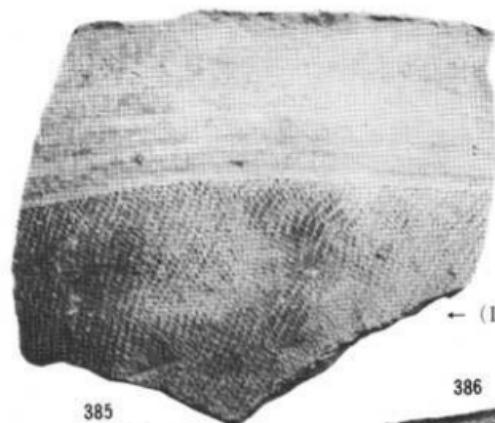
☆ [P. L 63] ここに掲げたものは、第8群土器(大洞C 2式)の鉢形～深鉢形土器の典型的タイプを示したものである。このものは、いずれも半精製土器で、両者ともその内、外面に煮沸痕をもつものである。

- 口縁は平縁で、その上端には、撚糸を押圧してつけた刻目文があり、頸部には、浅い沈線文が3条めぐっている。肩部には、2ご1対の粘土粒が4対付されるもの(374)、ないもの(373)の二種がある。
  - 肩部下より胴部へかけては、輥位の單軸撚糸文が密に施文されるもので、その撚糸文は、(L  $\left\{ \begin{smallmatrix} r \\ f \end{smallmatrix} \right\}$ )、(R  $\left\{ \begin{smallmatrix} f \\ l \end{smallmatrix} \right\}$ )の二種がある。
- ☆ [P. L 63~P. L 64] には、この1タイプを示した。さらに細別される可能性をもっているが、本報告書ではふれないことにしたい。
- この大洞C 2式期においては、このタイプが一典型として存在するが、つぎの(大洞C 2-A式→仮称)の時期まで併行するものである。



☆ [P. L64] ここに掲げたものは、鉢形、または深鉢形土器の破片である。このうち(375・378)は、第7群土器（大洞C 1式）、他は第8群土器（大洞C 2式）として分類した。

- これらのものは、口縁上端に撚糸文を押紋し、頸部には、2~3条（3条が基本）の浅い沈線文があり、肩部が張り、そこには、2~1対の粘土粒を付するものもある。
- 肩部より胴部には、単軸撚糸文が縱位に施文されるもので、この期の典型的タイプの一つである。いずれも半精製土器である。



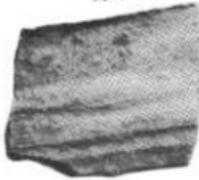
(L, R { e | e })

385

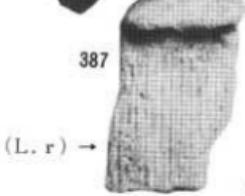


(L, R { e | e }) →

386

☆第8群土器  
(384・386)

387



(L, r) →

388



← (L, r)

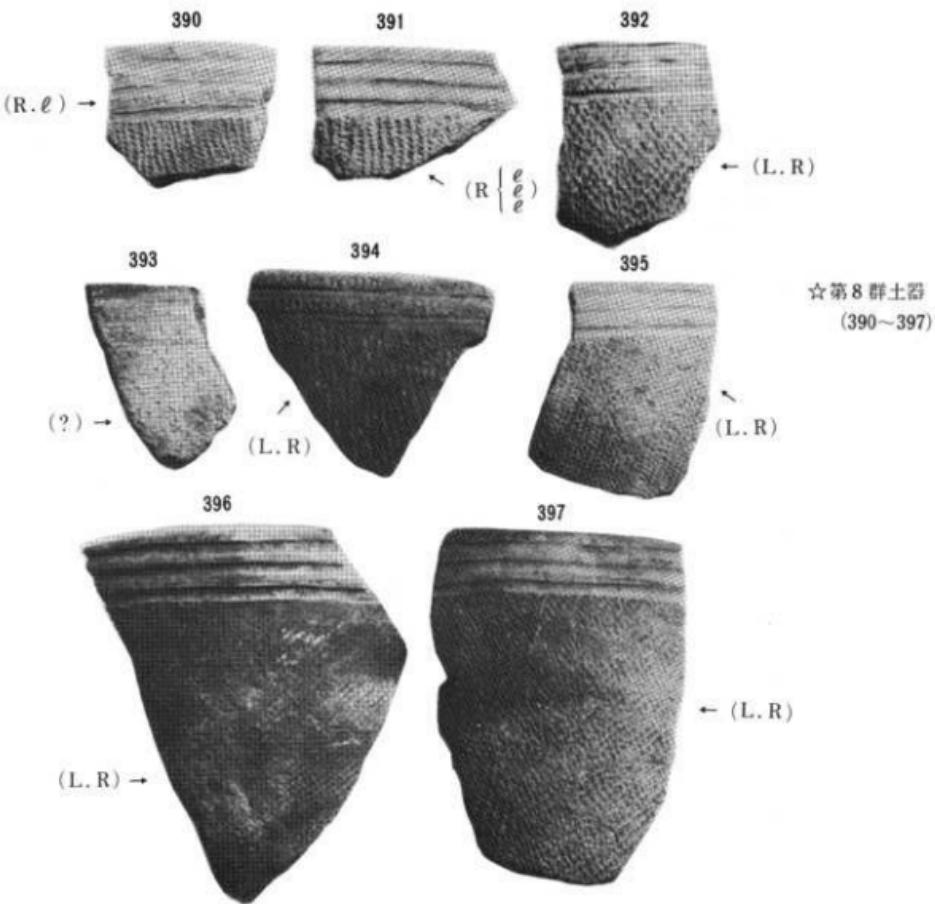


← (L, r)

☆第10群土器  
(385)

☆ [P. L65] ここに掲げたものは、第7、第8、第10群土器（大洞C1、C2、A式）の深鉢、鉢形土器で、いずれも粗製土器である。

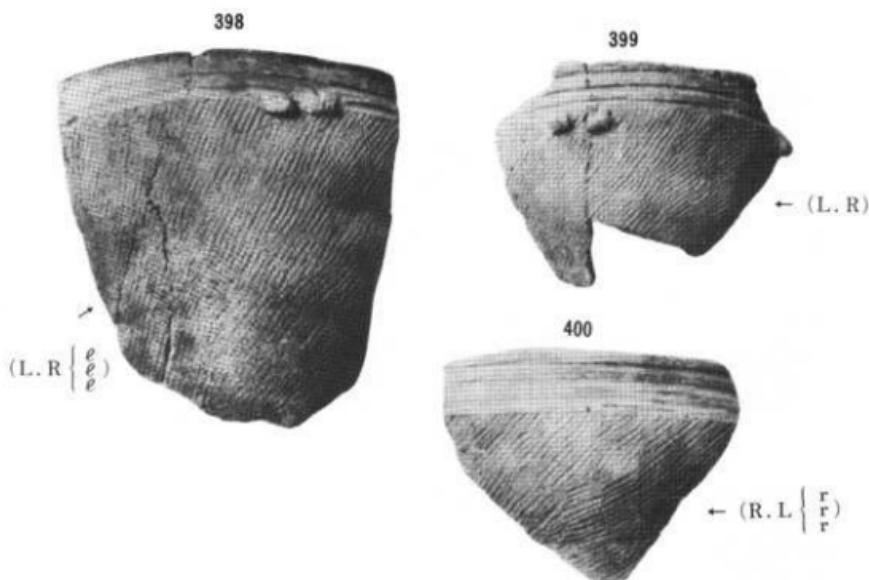
- (384・386) は、頸部に無文帯をもち、胸部には (L, R { e | e }) すなわち0段多条のL, R縄文が左傾する大形の深鉢である。(384)
- (385) は、口縁が肥厚し、左傾する縄文が施文されるが、口唇部に沈線文があり、第10群土器（大洞A式）の鉢形土器であろう。
- (387~389) は、口縁部が直立する深鉢形土器で大洞C1式期に盛行するタイプである。(出土のない遺跡もあり地域性があるように思われる。)



☆ [P. L66] ここに掲げたものは、小形の深鉢形土器である。いずれも第8群土器(大洞C2式)の仲間で粗製土器である。

- ・また、いずれも平縁で、頸部に3条の沈線文をめぐらし、胴部に左傾する繩文が施文されるもの(392・393・395~397)、ほぼ縦位に施文されるもの(394)、縦位の撚糸文の施文されるもの(390・391)の三種である。
- ・大洞C2式期には、平縁で、頸部に3条を基本とする沈線文をめぐらす施文手法が確立しており、一タイプをなしている。

## ☆第8群土器 (398~400)

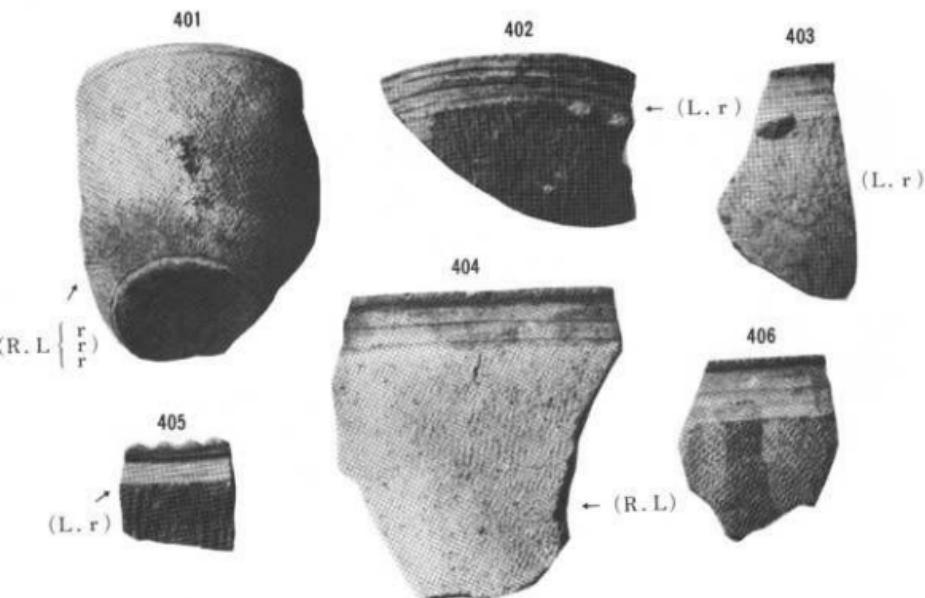


☆ [P. L67] ここに掲げたものも第8群土器 (大洞C2式)の鉢形土器で半精製土器である。

- ・ いずれも①口縁上端に原体と思われる繩文の押圧による刻目状の押圧文が付され、②頸部より肩部へかけては、やや幅広の浅い沈線文が3条めぐり、③肩部には、2ヶ1対の粘土粒が4対対象的につけられるものと付けられないものがある。(前者が多く、後者の出土数が少ない)、また、④肩部下には、左傾する繩文 (L.R, L.R { l }) が施文されるものが多く、但し L.R { l } は少なく、R.L または R.L { r } も少數である。

☆ 上記の①~④は、第8群土器 (大洞C2式)の深鉢・鉢形土器の基本的な施文タイプであるが、このタイプが [P. L63, P. L64] に掲げたタイプとともに、この期の深鉢・鉢形土器の二つのタイプであり、本タイプが最も盛行するものである。

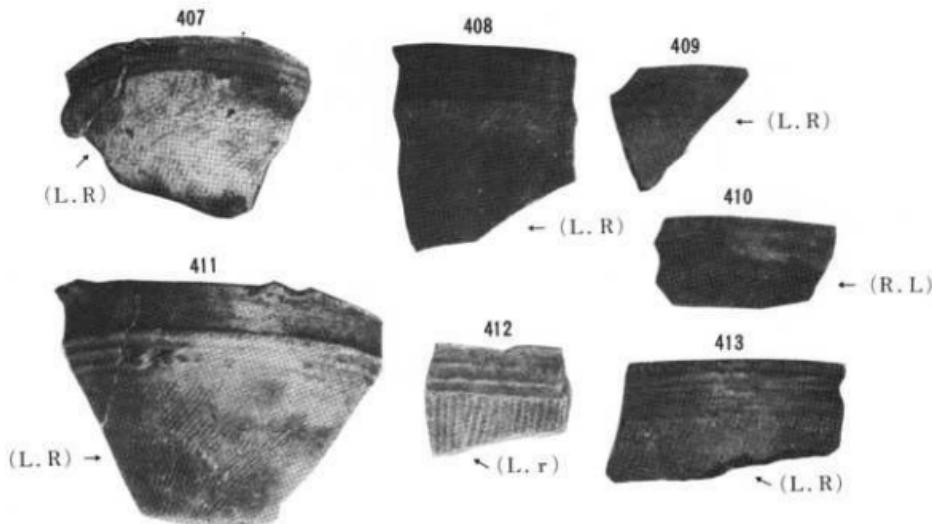
## ☆第8群土器 (401~406)



☆ [P. L68] ここに掲げたものは、第8群土器(大洞C2式)の小形鉢形土器および深鉢形土器の破片である。いずれも半精製土器である。

- ここでは、その施文法において数少ないもの、および器形の特異なものを示したものである。
- (401) は、0段条の (R.L { } r ) 繩文で右傾する繩文の施文されるもの、(402・403・405) は、単軸撚糸文であるが (403) は右傾するものである。
- また、(404・406) は、二段単節の繩文 (R.L) で右傾するものである。
- (405) は、口縁が小波状を呈し、頸部には3条の沈線文があり、肩部が張って、頸部が約23°~25°内傾する器形のもので、少數の出土である。

☆第8群土器 (407~413)



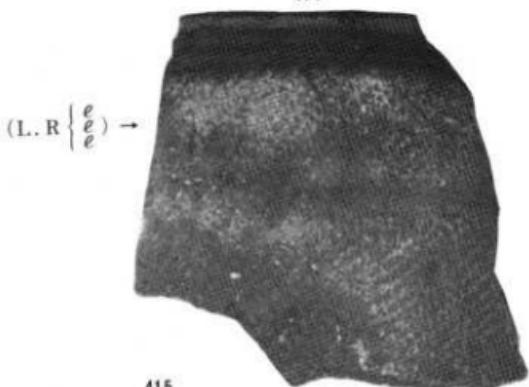
☆〔P. L69〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の鉢形・深鉢形土器である。（いずれも粗製土器）

- このうち（407・411）は、小形の鉢形土器で、（411）は頸部に無文帯をもっており、他は、すべて頸部に平行沈線文3条をめぐらすもので大洞C2式鉢形・深鉢形土器の一タイプである。
- （409）は、肩部下の右傾する縄文が（L, R）、二段單節縄文である。このものは、例外的なもので原体の回転方向が上・下であることを物語っている。
- （412）は、単軸燃系文が縦位に施文される深鉢形土器である。このものも大洞C2式期の典型的一タイプである。（P. L63~65参照）
- （408・410・413）は、口縁に刻目・頸部に沈線2~3条、胴部に左傾する縄文（L, R）という典型的タイプであるが（410）は小形鉢である。（写真が不鮮明なのをお許し下さい。）

〔深鉢形土器〕 (414~416)

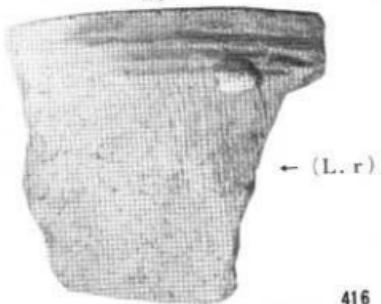
... ...

414



☆第8群土器  
(414~416)

415



416



☆ (P.L.70) ここのは、いずれも第8群土器（大洞C2式）の深鉢形土器である。

- (414~416) は、この期の典型的な形狀、施文を有するものである。(いずれも大形のものである。)

## ☆第8群土器(417~419)

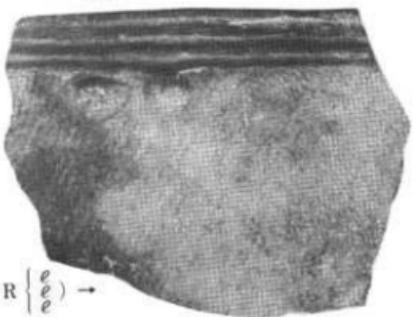
417



418



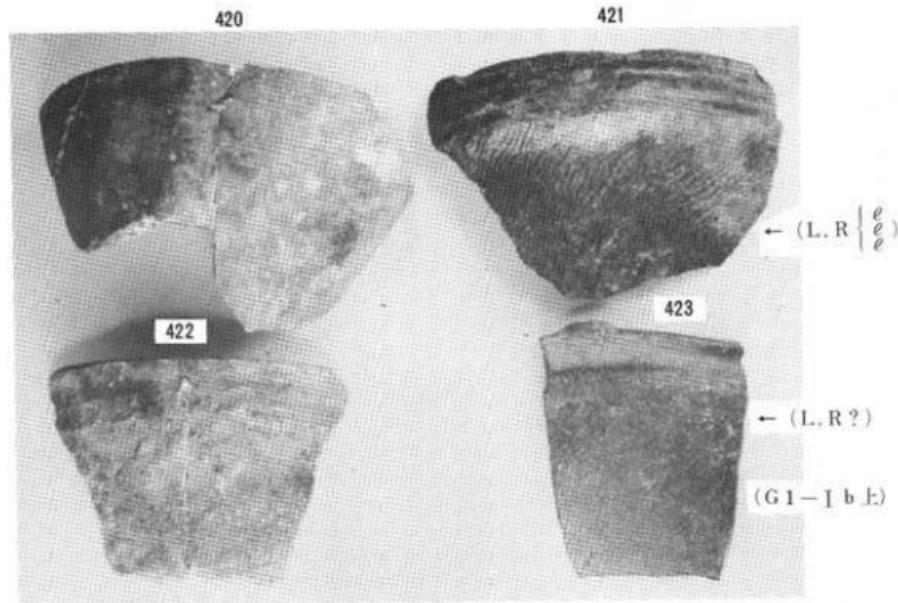
419



☆ [P. L71] ここに掲げたものも第8群土器(大洞C2式)の深鉢形土器(粗製)である。

- (417) は、大形の深鉢形土器で左傾する縄文が(R.L)で出土数の少ないものである。(既に述べてきたようにL.Rで左傾するものがノーマルである)
- (418・419) は、これも大形の深鉢形土器で、口縁部、頸部、胴部の施文は、[P. L67-①~④]に述べたとおりであり、典型的なものである。

## ☆第8群土器(420~423)



☆〔P. L72〕ここに掲げたものは、第8群土器(大洞C2式)の小形鉢形土器であつて、いずれも粗製土器である。

- ・(420・422)は、無文土器である。このうち(422)は、口縁部上端に刻目、頸部に3条の沈線文が一部にあり、胴部は無文のものである。
- ・(421)も小形の鉢形土器である。左傾する縄文は、(0段多条のL,R)で、この施文のものは少數の出土である。
- ・(423)は、G1-Ib上出土で風化しているものであるが左傾する縄文が施文されるものである。